

愛媛県歴史文化博物館『研究紀要』第十一号抜刷
平成十八年三月三十一日

資料紹介

「明治三十七、八年戦役ニ於ケル
野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴 旅順要塞攻囲戦ノ巻」(下)

平井 誠

資料紹介

「明治三十七、八年戦役ニ於ケル

野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

旅順要塞攻囲戦ノ巻」(下)

平井 誠

一、資料の内容

本号では、前号に引き続き、第三編第七章から最後までを紹介する。

第一編 動員下令ヨリ対敵行動ニ移ルマデノ状況

第一章 動員実施ノ状況

第二章 待令間ノ状況

第三章 船舶輸送

第四章 上陸後ノ行軍

第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘

第一章 南沙河口付近ニ於ケル攻囲戦線ノ編成

第二章 六月廿六ヨリ七月廿五日ニ至ル間ノ状況

第三章 七月廿六ヨリ二十八日ニ至ル大白山攻撃

第四章 七月三十日ノ前進

第五章 大小孤山ノ攻撃

第三編 旅順要塞戦闘

第一章 攻撃準備

第二章 旅順要塞第一回総攻撃

第三章 八月二十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル状況

第四章 旅順要塞第二回総攻撃

第五章 第二回総攻撃終了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況

第六章 旅順要塞第三回総攻撃

第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル状況

前号掲載

前々号掲載

第八章 東鷄冠山北砲台ノ攻撃

第九章 十二月二十日ヨリ三十一日ニ至ル状況

第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル状況

第十一章 旅順開城及其ノ後ノ状況

第四編 給養及衛生

第一章 給養

第二章 衛生

附録、附表、附图(附图は略されている)

二、今回の紹介

第三編 旅順要塞戦闘

第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル状況

明治三十七年十二月一日、第三回総攻撃で戦傷した土屋光春に替わり、鮫島重雄が第十一師団長に任じられた。同日二日から三日にかけて、休戦し、師団前の敵陣地に横たわる戦死者を収容した。日露の将校達は、打ち解けて語り合い、互いに称賛があった。この状況を「当代戦争ノ一奇観」と評している。同月八日、ステッセル中将は、会議を開き、旅順開城の時期が迫っていることを告白したが、スミルノフ中将、コンドラテンコ中将が反対した。²⁰³高地を占領した第三軍は、攻撃目標を二龍山、松樹山、東鷄冠山に移した。第十一師団は、ま

本号掲載

ず東鷄冠山北砲台の占領を目標とした。同月十五日、²⁰³高地からの攻撃により、旅順港に在る露軍の第一太平洋艦隊は全滅した。また、同日、東鷄冠山北砲台の掩蔽部に、日本軍の二十八榴榴弾が命中し、コンドラテンコ中将が戦死した。日露戦争では、赤十字の活動が有名だが、現実の戦闘では、混乱していたようである。同日、ステッセル中将は、赤十字旗を掲げている露軍の病院に対し、日本軍が砲撃を加える状況に注意を求めた。これに対し、第三軍司令官乃木希典は、赤十字旗に対し、砲撃を加えるつもりはないが、陣地から赤十字旗が見えないこと、弾丸が必ずしも目標に命中しないことを理由に、遺憾の意を伝えた。

第八章 東鷄冠山北砲台ノ攻撃

第十一師団は、東鷄冠山北砲台の攻撃にあたり、十一月二十六日の攻撃後は、胸壁を爆破し、奇襲攻撃を行う方針を取った。十二月十五日、胸壁内への坑道作業が完成した。当時、野戦砲兵の弾薬は日々欠乏し、一門六十四発となっていた。弾薬の欠乏は、射撃の巧妙を以て補うほかなかった。同月十八日、ついに東鷄冠山北砲台の胸壁が爆破され、突撃が実施された。野戦砲兵は、歩兵を援助するため、攻撃を加えた。長時間にわたる猛烈な交戦の末、第十一師団は、東鷄冠山北砲台を占領した。この戦闘で、露軍は、火砲七門、機関銃四挺、人員四百人を失った。第十一師団が、東鷄冠山北砲台を攻撃して四ヶ月、その犠牲者は五千人に上った。

第九章 十二月二十日ヨリ三十一日ニ至ル状況

十二月二十八日、第九師団は、二龍山砲台の胸壁を爆破し、突撃して占領した。野戦砲兵は、胸壁の爆破と同時に射撃を開始し、これを援助した。翌二十九日、ステッセル中将は、旅順開城を決意し、諸將と会議を開いた。しかし、砲兵科の将官達が、時期尚早であると反対し、ステッセル中将も同意した。同月三十一日、第一師団は、松樹山砲台の胸壁を爆破し、突撃して占領した。野戦砲兵は、胸壁の爆破と同時に射撃を開始し、これを援助した。砲台内の露軍は、

白旗を掲げて降伏した。露軍の戦死者は百二十名、降伏者は百三十名であった。

第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル状況

明治三十八年一月一日、野戦砲兵は、H砲台から東鷄冠山砲台に亘る敵陣地を砲撃をした。第九師団がH砲台を占領したの続き、第十一師団は望台の占領を目指した。野戦砲兵第一大隊は、望台背後の敵兵に向け、猛烈に射撃を加えた。しかし、一方で、東鷄冠山砲台から第二大隊への砲撃も猛烈であった。第四中隊の左翼にいた連隊長深堀中佐が戦傷したため、第二大隊長酒寄少佐が連隊の指揮をとった。望台の露軍は、頑強に抵抗し、歩兵の攀登を拒んだ。そこで、第一大隊は、望台の頂上及び背後に向かい極力射撃を実施した。その結果、第二大隊長が戦死するなど、接戦の末にようやく望台を占領した。この新年早々の戦闘の前に、昨夜、兵士達には清酒二合、生野菜、干物野菜、生餅が配られた。元旦の祝儀と敵砲台陥落の前祝を兼ねてのものであった。

第十一章 旅順開城及其ノ後ノ状況

明治三十八年一月二日、東鷄冠山砲台は、大爆発を起こした後、銃砲を乱射して静粛した。よって、第十一師団は、殆ど抵抗を受けることなく東鷄冠山砲台を占領した。同日、露軍は、旅順開城に調印した。これまでの旅順攻撃による第三軍の戦死者六千七百三十六人、戦傷者二万四千七百五十三人、行方不明七千四百四十人、死傷馬匹百二、小銃弾八百五十二万六千四百三十八発、砲弾二十二万四千二百八十三発、多大な犠牲をばらつての勝利であった。同月四日、第十一師団長鮫島重雄中将は、教育の骨幹である将校、下級幹部が不足している状況において、軍紀、風紀の振興を厳正にするよう訓示している。一方、ステッセル大將は、旅順の開城に至る心境とこれまでの忍耐を兵士に謝している。翌五日、第三軍司令官乃木希典とステッセル將軍の会見が水師營で行われた。開城の条件に基づき、同月七日に守兵、同十日に諸物件、軍艦及備品の授受を終え、翌十一日にステッセル中将は旅順を去った。旅順の開城により、日本が受けた露軍の捕虜は、将校以下三万七千五百二十七名、馬二千五百頭、火砲三

百十二門であった。第三軍は、同月十三日に入城式、翌十四日に臨時招魂祭を行った。この後、第十一師団は、奉天会戦に向け北上することになる。

第四編 給養及衛生

第一章 給養

第一節 上陸後ヨリ大孤山攻略ニ至ル間ノ給養

塩大壇上陸後は、南沙河口まで、兵站部で糧秣の補充を受け、連夜窮屈な天幕露営を余儀なくされた。特に、渴望したのは、生野菜であった。南沙河口に到着すると、天幕露営の外、廠舎や民家を利用した。明治三十七年六月四日、大連に市場が開設されると、魚や野菜の供給は潤沢となった。しかし、その購買は、強奪に近かった。同月十二日、第十一師団長土屋光春は、地元民に軍紀の厳肅さを示すことが重要であり、師団の名譽を損ない、第三軍の消長に関わるとして、不法な購買をしないよう訓示している。同月十七日、初めて清酒が支給され、「快味云フヘカラス」と記されている。携帯する食料は、糲ほろしいと重焼麵包の二種類があった。糲は準備に時間と労力を要するため、戦闘中は重焼麵包を主とした。(現在も善通寺市に、当時から重焼麵包(固パン)を販売している商店が現存する)八月初旬、脚氣が流行したため、麦飯を励行した。行軍及び戦闘中は、燃料に乏しく困難を感じた。地元民の反感を顧みることなく、立木を切り、燃料を徴発した。飲料水は至る所不良で、脚氣を続発した。

第二節 旅順要塞本防禦線攻囲間ノ給養

旅順の防禦線に近迫後は、終始同一陣地であった。そのため、給養は簡便であった。唐黍、大小豆等の成熟期であったため、是非の区別がつかない兵士は争って採取し、一ヶ月で附近の田畑は荒廃した。多少の生野菜も、附近の村落から徴発できたので、飯盒で個人的に温汁を調理する兵士もいた。炊爨は、段列において実施し、輪卒が陣地まで運搬した。段列と陣地は、二千メートルの距離があったため、陣地の兵士が温食をとることは稀であった。脚氣予防のため、

め、麦飯を奨励したが、効果が乏しいため、昼食に重焼麵包を使用した。幕営の方法は、陣地と段列で異なった。陣地では、敵弾に対する顧慮を主とし、警急集合できるよう、各砲台側に土窟を掘った。一方、段列では、給養の便利を主とし、設備の完全に勉め、穴居的小市街の觀を呈した。明治三十七年十月二十六日以後、生豚、生牛の支給が開始され、各部隊ごとに屠殺した。しかし、なぜか下士卒の多くは、豚肉を喜ばなかったため、給養上、非常に不便を感じた。翌月十三日、副食物の定量二分の一は、現地調達するよう定められた。

第二章 衛生

第一節 人ノ衛生

健全な状態で出征したが、明治三十七年六月初旬に至り、患者を生ずるようになった。原因の一つには、氣候風土の相違、給養の欠乏、労力の過大であり、いま一つは、戦時定員が多大な中で、虚弱なる兵員が混在しているためであった。最も重大な影響を及ぼしたのは、湿気を吸引しやすい天幕、露営、給養の変化にあった。これらは、戦時においてすぐに除去できないものであり、軍陣営生上の弱点であった。七月中旬になると、不良水の飲用、飽きやすい缶詰類による食あたり、湿気による脚氣や下痢を併発するようになった。そして、八月初旬には、日々数十名の入院患者を出すようになった。兵員の減少は、戦闘よりも、疾病によるものが多かった。そこで、衛生講話、清潔法の励行、衛生委員を設け、健康状態の維持、改善に努めたが、多くの兵員は、顔色が憔悴し、意気があがらなかった。また、受診や入院を恥じて手遅れになったり、全治退院に多くの日数を要した。しかし、赤痢やチフスのような伝染病は発生しなかった。現役兵の健康は、予備役兵に勝り、予備役兵の健康は、短期教育の補充兵に勝った。また、入院は、兵卒より下士が少なく、将校は皆無であった。これを、名譽心と義務心の厚薄に起因する、と精神論で判断している。

第二節 馬ノ衛生ニ就テ

在来の隊馬は、至って健康で、減少率も極めて少なかった。それに対し、徴

癆馬の体質は虚弱で、行軍途中に斃死、廢馬となるものもあつた。しかし、幸い炭疽病のような伝染病にかかる馬はなかつた。また、保育の不備に起因して廢馬となる馬も少なかつた。これは、軍馬の補充が困難な日本軍にとつて、喜ぶべきことであつた。平常から馬を慈しみ、戦時には保育に周到であるよう注意している。

附録

第一 旅順戦闘歴

第二 旅順戦闘ニ於ケル戦死将校略歴

第三 旅順戦闘ニ於テ戦死シタル下士兵卒連名簿

附表

第一 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、死傷者一覽

第二 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、入(退)院患者一覽表

第三 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル廢斃馬一覽表

第四 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル人馬補充一覽表

第五 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、彈藥消費一覽表

三、資料翻刻を終わるにあたって

本資料の特徴は、上巻で記載した通り、野戦砲兵第十一連隊陣中日誌、同戦闘詳報、同第一第二大隊戦闘略歴を始めとする、数々の一次資料に基づいて編集されていることである。その意味において、本資料は、単なる個人的な回想録を超えた資料と言える。また、本資料の編纂が、小隊長として実際に参加した平原長志によるものであり、日露戦争終結後、六年しか経てない時期に編纂されたというのも、本資料に臨場感を与えている。戦史は、主として前線の歩兵に偏重しがちであるが、日露戦争における砲兵は、二十八番砲に代表される

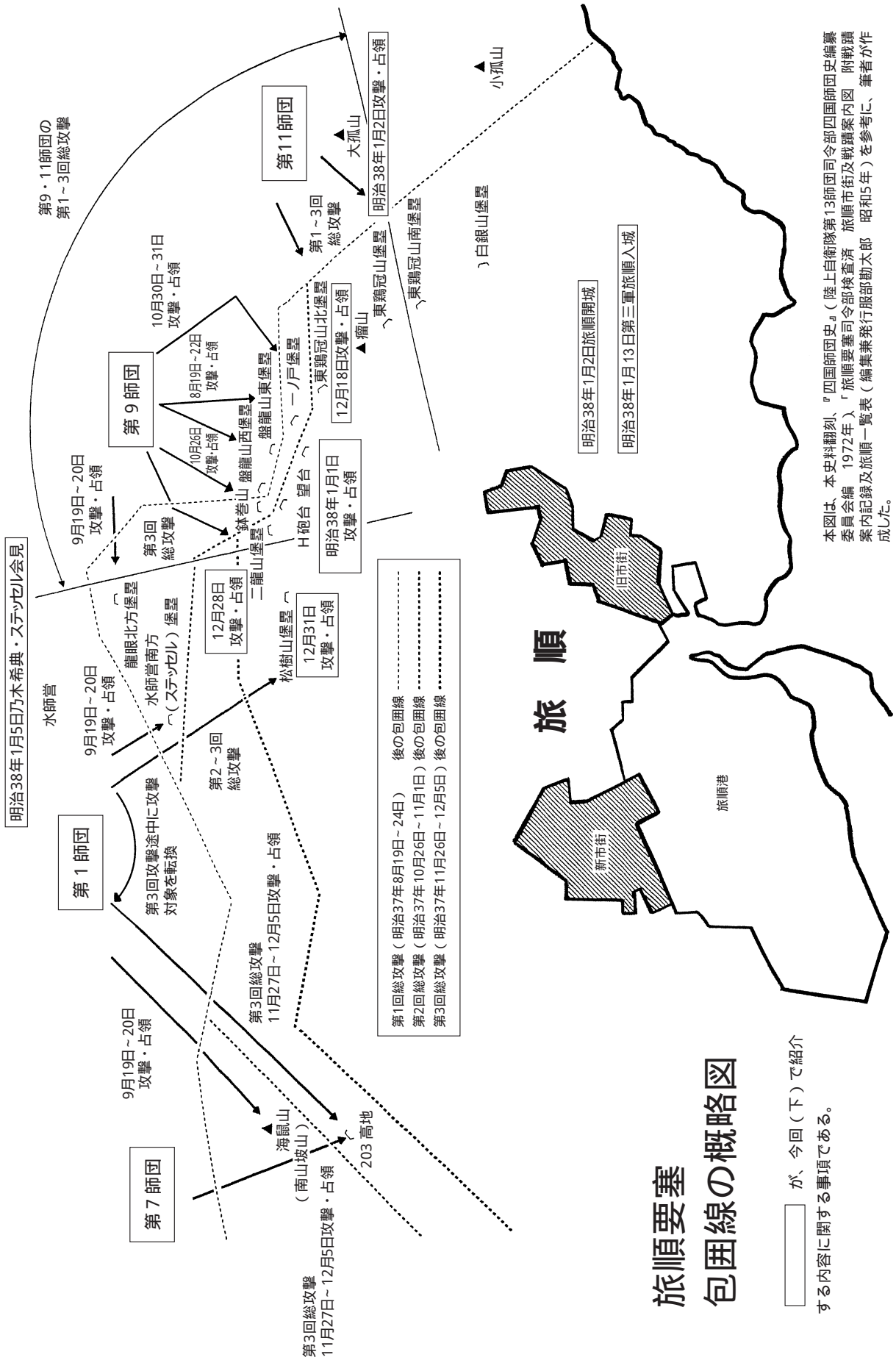
ように、砲兵が大きな役割を果たした。そうした日露戦争の全体的な視点からも、本資料の歴史的意義は大きい。

本資料は、動員下令から旅順要塞の開城までを、編年体で記載している。師団命令、連隊命令等が多く記載され、一次資料に基づく編纂であることを認識させる。部分的には精神主義的な表現も見られるが、全体的には客観的な記載と言えよう。戦死者数、戦傷者数、消費弾薬数等の数値は、戦闘状況を如実に物語っている。また、食糧事情、軍馬の状況等、戦闘以外のことも多く記載されており、本資料にさらなる歴史的意義を付与している。

ただし、本資料を使用するにあたり、注意も必要である。本資料は、筆写本である。大正五年、平原とともに小隊長として日露戦争に参加した宇都宮孝行が、妹の緑に筆写させたものである。平原が編纂の際に間違えたか、緑が筆写の際に間違えたか、ともかく参考文献等、他の資料と比較すると、誤字や日付に間違いが認められる箇所がある。戦死者数、戦傷者数、消費弾薬数等の数値については、戦史研究上、差の見られる項目であり、写本故に一層の慎重さが求められる。しかし、本資料が、砲兵から見た日露戦争としての貴重な資料であることに間違いはない。歩兵に比較して顧みられる事が少ない中で、砲兵に関する詳細な情報が記載されている。本資料を通して、日露戦争の新たな一面を浮かび上がらせることができれば幸いである。

凡例

- 一、文字は原則として常用漢字を用い、常用漢字にないものは正字を用いた。但し、人名・地名は表記のまま記した。
- 二、誤字・脱字は(ママ)(カ)と傍注、虫損・汚損などによって文字が判読できない箇所は 以示し、平出は一マスあけとした。
- 三、読みやすくするため、適宜読点を施した。
- 四、死傷者数等、数値については、参考文献と異なる部分もあるが、原文のまま解説・翻刻した。



本図は、本史料翻刻、『四国師団史』(陸上自衛隊第13師団司令部四国師団史編纂委員会編、1972年)、「旅順要塞司令部後査済 旅順市街及戦蹟案内図 附戦蹟案内記録及旅順一覽表(編集兼発行服部勲太郎 昭和5年)を参考に、筆者が作成した。

【参考文献】

- ・「旅順降伏記念帖」 『日露戦争実記』 第十三巻臨時増刊号 博文館 一九〇五年。
- ・「日露戦争写真画報」 『日露戦争実記』 第十五巻 博文館 一九〇五年。
- ・「旅順現状写真帖」 『日露戦争実記』 第二十一巻臨時増刊号 博文館 一九〇五年。
- ・陸上自衛隊第13師団司令部編 『四国師団史』 陸上自衛隊第13師団司令部 一九七二年。
- ・客野澄博 『二十二連隊始末記』 愛媛新聞社 一九七二年。
- ・愛媛県史編纂委員会編 『愛媛県史』 近代(上) 愛媛県 一九八六年。
- ・河合 勉 『愛媛の郷土部隊』 愛媛文化双書刊行会 一九八八年。
- 前号の参考文献に掲出していた『日露戦争画報』について、『日露戦争実記』に訂正する。

第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル狀況

十一月二十九日、喜多島特務曹長、少尉二任セラル、
十二月一日、陸軍将校以下負傷者用トシテ、皇后陛下御調製被遊タル木綿巻軸繃帯式拾箱ヲ、野戦病院へ下賜ノ御沙汰被為在、内五箱ヲ当軍へ配当セラル、十二月十二日、左ノ通牒アリ、
陸軍中将鮫島重雄閣下ハ、今般当師団長ニ任命セラル、中将ハ、先般来第三軍司令部ニ出頭セラレアリ、明三日師団へ赴任セラル、
実ニ多年訓育統御ノ任ニ当ラレタル第十一師団長土屋中将ハ、第三回総攻撃ノ際、勇敢ナル行動ヲナシ、遂ニ殆ト致命的重傷ヲ受ケラレシナリ、
此ノ日午前十一時ヨリ、我師団前面ノ敵陣地ニ於ケル屍体ノ收容ニ着手シ、彼我共入交リ、互ニ收容交換ニ勉メタリ、其ノ間将校ハ、打解ケテ談話ヲ交へ、互ニ敵ノ勇敢ナル行動ヲ称賛シ、歎ヲ尽シテ無事屍体ノ半ヲ收容シ、翌三日、

更ニ全部ノ始末ヲ了シタリ、是レ実ニ当代戦争ノ一奇観ニシテ、互ニ国旗ヲ徹スルヤ、再ヒ彼我ノ銃砲声ハ、段々トシテ戦場ノ遠近ヲ賑ハセリ、
十二月三日、津曲中尉ノ指揮セシ第五中隊第五砲車八、師団長ヨリ賞賜ヲ賦与セラル、此ノ砲車八、去十一月十九日、地下線ニ於テ偉勲ヲ奏シタルモノナリ、
十二月五日、通牒ヲ以テ、全軍下賜以下肩章ヲ除去セラル、是レ一八經濟二利シ、一八隊号ヲ敵ニ秘センカ為メナリシナラン、
十二月六日、左ノ通牒ニ接ス、

一、赤坂山及寺兒溝東北方高地並ニ三里橋北方高地ハ、我軍之ヲ占領セリ、
二、二十八珊瑚榴弾砲ノ軍艦射撃ハ、最モ好果ヲ得、敵艦「ギリヤク」ハ沈没シ、「ボベータ」ハ僅ニ甲板ヲ露ハシ沈没セリ、
三、敵ノ軍使ハ、白旗ヲ掲ケテ203高地ニ来リ、屍体ノ收容ニ関スル協議ヲ遂ゲ、我方軍之ヲ承諾セリ、

十二月七日、予備陸軍砲兵少尉秦克己、中尉二昇進ス、
十二月八日、左ノ通牒ニ接ス、

旅順港内ニアル敵艦中、健在ト認ムヘキモノハ二艘ノ砲艦ト、水雷艇十余艇ノミ、他六日以来ノ砲撃ニ沈没シ、或ハ大損害ヲ受ケ、戦闘力アルモノナシ、
十二月八日、「ステッセル」中将ハ、主要ナル幹部ヲ集メ、要塞防御ニ関スル會議ヲ開キ、暗々裏ニ開城ノ時機、既ニ迫レルヲ告白セリ、是ニ対シ、「スミルノフ」中将以下、拳テ反対意見ヲ述ヘ、「コンドラテンコ」中将ノ如キ切齒扼腕シテ、其ノ非ヲ痛論セリト云フ、露軍又勇將アリト云フヘシ、
十二月九日、左ノ通牒ニ接ス、

一、一戸堡壘二八、十五珊瑚白砲ヲ据付ケ、明日ヨリ砲撃ヲナス等
二、昨日、更ニ203高地ノ東南方向地ヲ占領セリ、
十二月十二日、左ノ師団命令ヲ受領ス、

第十一師団命令 十二月十二日午前七時三十分

於大孤山北麓司令部

一、軍八、自今、正攻的動作ニ依リ、望大^(台力)一帯ノ高地ニ対スル攻撃ヲ繼續シ、先ツ速ニ龍山、松樹山及東鷄冠山ノ三砲台ヲ奪取セントス、第七(後備

歩兵第一旅団ヲ含ム)及第一師団八、石板橋西北高地ヨリ、寺児溝北方高地ヲ経テ、三里橋北方高地二巨ル線ヲ占領シ、該方面ノ敵八、椅子山ヨリ西太平洋溝砲台ヲ経テ、鴨湖嘴砲台二巨ル堡塁線ニ引退セリ、以上兩師団八、引續キ此ノ敵二向ヒ、為シ得ル限り工事ヲ施設シテ、前方ノ地域ヲ占領スルコトヲ勉メ、特ニ第七師団八、準備成リ次第、揚樹房東北方約千米突ノ高地ヲ奪取スル筈、

203 高地占領ト同時ニ開始セシ敵艦砲撃八、至大ノ効果ヲ奏シ、去ル九日、港外ニ遁避セシ戦艦一ヲ除キ、他ノ戦艦及巡洋艦ノ全部並ニ砲艦一八、殆ンド撃沈セラレ、全ク其ノ航行力ヲ失フニ至レリ、

攻城砲兵及海軍砲八、港内敵艦ニ対スル砲撃ヲ継続シ、諸艦船ヲシテ其行動ヲ失フニ至ラシメ、同時要塞内部ニ在ル主要ナル建築物並ニ敵兵ノ集屯所等ヲ砲撃シテ、要塞内部ヲ攪乱セシムル筈、

後備歩兵第四旅団(第九連隊及第八連隊ノ第一大隊欠)ノ残部タル一大隊及工兵第八大隊第一中隊八、新ニ當師団ニ属セラレ、従來當師団ニアリシ機関砲四門八、第七師団長ノ指揮下ニ入りタリ、

二、師団八、先ツ東鷄冠山北砲台胸牆ノ爆破ト同時ニ、突撃ニ依リ之ヲ占領セントス、

三、山中地区隊中、東鷄冠山北砲台攻撃隊八、成ルヘク速ニ全砲台胸牆爆破ノ準備作業ヲ完了シ、同時ニ突撃諸準備ヲ整備スヘシ

四、前田地区隊八、東鷄冠山北砲台ニ対スル攻撃作業ヲ援助スルト同時ニ、前面ノ攻路ヲ進捗セシメ、為シ得レハ旧囲壁ノ若干部ヲ爆破スヘシ、

五、爾余、諸隊ノ位置任務従前ノ如シ、

第十一師団長 鮫島重雄

当日、陸軍省人事局長ヨリ、左ノ要旨ノ電報アリタル旨通牒アリ、

十二月十一日附、陸軍砲兵少佐伊藤弦八、野戦砲兵第二旅団彈藥大隊長ニ転シ、其ノ後任ハ、陸軍砲兵大尉森俊蔵ナリ、

依テ第一大隊長酒寄少佐ヲ第二大隊長ニ、第六中隊長森大尉ヲ第一大隊長ニ命課ス、

十二月十三日、師団命令ニ基キ、第二大隊ヨリ砲車一門ヲ東鷄冠山北砲台穹窿内ニ出シ、山中地区隊長ノ指揮ヲ受ケシム、之ヲ指揮管八、砲兵中尉向井傳次郎ナリ、

十二月十三日、左記要旨ノ命令ニ接ス、

第十一師団命令 十二月十三日午後八時

於大孤山北麓司令部

左ノ如ク軍隊区分ヲ改ム、

前田地区隊

長 前田少将

歩兵第二十二旅団司令部

歩兵第四十三連隊(一大隊欠)

歩兵第十二連隊第三大隊

野戦砲兵第十一連隊第六中隊ノ一小隊

騎兵一分隊

迫撃砲四門

機関砲第五小队ノ一分隊(二門)

工兵第八大隊第一中隊(一小隊欠)

山中地区隊

長 山中少将

歩兵第十旅団

騎兵小隊長ノ指揮スル半小队

迫撃砲十六門

機関砲第七(一分隊欠)、第八小队

(十門)

工兵第十一大隊(第二、第三中隊)

竹内地区隊

長 竹内少将

後備歩兵第四旅団司令部

全第三十八連隊本部並ニ第一大隊

全第八連隊本部並ニ第二大隊

機関砲第五小队(一分隊欠)四門

騎兵第十一連隊第二中隊(一分隊欠)

野戦砲兵第十一連隊第三中隊

野戦砲兵隊

長 深堀砲兵中佐

野戦砲兵第十一連隊(第三中隊及第六中隊ノ一小隊欠)

全第十八連隊第二大隊(野砲十二門)

四十七密速射砲隊

長 古川砲兵少尉

第三、第六、四十七密速射砲小队(四門)

新山地区隊
長 新山歩兵大佐
歩兵第十二連隊(第三大隊欠)
騎兵一分隊
迫撃砲七門
機関砲第六小隊(一分隊欠) 四門
工兵第十一大隊第一中隊(一小隊欠)

予備隊
後備歩兵第三十八連隊第二大隊
騎兵一分隊
工兵第八大隊第一中隊ノ一小隊
工兵第十一大隊本部並ニ第二中隊ノ一小隊
軍直屬部隊
歩兵第四十三連隊第一大隊
騎兵一分隊

此ノ命令ニ基キ、第六中隊八一小隊ヲ前進陣地ニ留メ、他八旧陣地ニ帰還セシメタリ、

十二月十五日、港内ノ大軍艦八、概ネ撃沈セラレ、其否ラサルモノモ、亦自ラ沈没シテ、露国太平洋艦隊八、茲ニ全滅ノ悲運ニ陥レリ、又同日、旅順防御ノ勇將タル第七師団長「コンドラテンコ」中將八、東鷄冠山北砲台ニ於テ、下士ノ殊勲者ニ「ケオルギー」勲章ヲ授与シ、諸將校ト快談シツツアリシニ、午後九時、二十八珊榴彈掩蔽部ニ命中シ、壮快ナル戦死ヲ遂ケタリ、此ノ防御ノ中心トシテ、衆望ヲ一身ニ荷ヒタル中將ノ戦死ハ、守兵ノ志氣ヲシテ一層ノ阻喪ヲ来サシメタリ、

全日、砲撃ノ惨状ニ対シ、「ステッセル」中將八、左ノ一書ヲ日本軍司令官ニ至セリ、
閣下ヨ、予八閣下ニ告クルニ、貴軍ノ砲兵力、我病院ヲ砲撃スルコトヲ以テス、是等ハ、赤十字旗ヲ以テ明ニ標示セラレアリテ、貴軍ノ砲兵陣地ヨリ確認シ得ヘキ筈ナリ、貴軍トノ戦鬪ニ負傷シ、今ヤ病院ニアリ、又砲撃ノタメニ死ニ致サルヘキ我勇士ニ対シ、予八軼々同情ノ至ニ堪ス、是ヲ以テ、予八閣下ニ請フニ、其砲兵ヲシテ自今此ノ如キ拳ニ出テサラシメンコトヲ以テス、又負傷セル日本兵力、此等病院ニ在ルコトニモ注意セラレンコトヲ望ム、予八、此機会ニ際シ、閣下ニ敬意ヲ表ス、

此ノ要求ニ対シ、乃木大將八、左ノ返書ヲ送レリ、
閣下ヨ、予八開戦以來、我軍力赤十字旗ヲ樹テタル建築物及船舶ニ対シ、射撃ヲ加フルノ念ナク、又實際之ヲ企テタルコト無キヲ以テ、閣下ニ明言スルノ光榮ヲ有ス、然レドモ、要塞ノ大部分ハ、我砲兵陣地ヨリ之ヲ望見スルヲ得ス、又何人モ知レル如ク、弾丸ハ必スシモ所望ノ目標ニ命中スルモノニ非ス、防衛力頑強ニ、且ツ勇敢ナルニ依リ、我砲撃ハ、勢ヒ猛烈ナラサルヲ得ス、而テ我弾丸力、予期ノ目標ニ達セサル力如キハ、予ノ真ニ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ、予ハ、此ノ機ニ乘シ、閣下ニ敬意ヲ表ス、
十二月十六日、砲兵彈藥縦列長松本中尉、当連隊中隊長仰付ラル、依テ第六中隊長ニ命課ス、
十二月十八日、露軍八、病院ニ充用セル家屋ヲ記入セル市街図ヲ、日本軍ニ交附セリ、

第八章 東鷄冠山北砲台ノ攻撃

師団八、東鷄冠山北砲台ヲ奪取ヲ勉ムルコト久シク、攻圍ノ当初ヨリ一意専心、之ニ努力シツツアリシカ、数回ノ攻撃モ、遂ニ其ノ目的ヲ達スルニ至ラス、十一月二十六日ノ攻撃後ハ、胸牆ノ大爆破ト共ニ、奇襲的攻撃ヲ以テ、之ヲ奪取セントスルノ方針ヲ取り、胸牆内ノ坑道作業ヲ着々進捗セシメツツアリシカ、十二月十五日ニ至リ、予定ノ如ク作業ヲ完成スルヲ得タリ、

十二月十六日、師団命令ニ基キ、左ノ命令ヲ下ス、
一、師団八、来ル十八日、奇襲ヲ以テ、東鷄冠山北砲台ヲ奪取セントス、之カ為メ、該砲台突撃隊八、同日午後二時、正面胸牆爆破ト共ニ、突撃ヲ実施シ、之ヲ占領スル筈、

二、連隊八、現在ノ陣地ニ在テ、此ノ攻撃ヲ援助セントス、依テ各大隊ハ、胸牆爆破ト共ニ、射撃ヲ開始スヘシ、
十二月十七日、左ノ訓示ヲ受ク、

訓示

旅順要塞第三回総攻撃ヲ実施セントスルヤ、上耳ニ達シ、畏クモ特ニ優握ナル

勅語ヲ賜フ、希典奉答スラク、我軍將卒深ク聖旨ヲ奉体シ、速ニ軍ノ任務ヲ達成センコトヲ期スト、是レ諸子ガ熟知スル所、惟レ第三回總攻撃ニ於テ、千苦殆ド稀ナル勇敢壯烈ノ攻撃ヲ實施シタルモノ、是レ豈將卒一般深ク聖旨ヲ奉戴シタルノ致ス所ニ非シテ何ソヤ、諸子ガ奮闘ニ対シ、本防御線ノ攻撃ハ、予測ノ如ク成功セザリシト雖、敵ガ殆ト全力ヲ拳テ頑強ニ抵抗セシ²⁰³高地ハ、十二月五日ヲ以テ、全ク我有ニ帰セリ、蓋シ該高地ハ、旅順要塞ノ死命ヲ制スベキ要衝ニシテ、其ノ占領ハ、實ニ旅順港内ニ於ル敵ノ艦隊ノ全滅ヲ促シタリ、²⁰³高地ノ占領後、一週日ヲ出スシテ、敵ノ堅艦ハ、殆ト我重砲彈ノ為ニ沈セラレ、目下剩ス所ハ、僅ニ小艦數艘ニ過ス、此等殘艦ノ余命、又指ヲ屈シテ算ヘ得ヘキノミ、

敵ヤ既ニ衣食ニ窮セリ、其ノ戦員ハ、減耗セリ、加フルニ^(譯カ)彈藥モ又將ニ竭ントス、此窮境ニ際シ、我重砲ハ、日夜敵ノ殘艦ト要塞内部ニ於ル軍用資源トヲ破壊シツヽアリ、又敵ノ本防御線中、其ノ主要ノ点ニ対シテハ、諸子力堅忍ト勇敢トニ頼リテ、益々肉迫セリ、之ヲ攻略スルノ時機、遠ニ非ルヲ知ルベシ、今ヤ時^(譯カ)寒ニ向ヒ、攻撃ノ諸動作、逐日困難ノ度ヲ増加スト雖、亡戦友諸子力、勇敢忠烈以テ、殉國ノ義ヲ致シタル所以ヲ回想セハ、豈感奮興起セスシテ可ナランヤ、諸子力君國ノ為メニ尽スハ、此ノ秋ニアリ、諸子一層奮勵努力セヨ、

明治三十七年十二月十六日

第三軍司令官男爵 乃木希典

当時、我軍ハ、未熟ノ補充兵多カリシト雖、日夜戦闘ニ従事スル結果、戦闘動作ニ慣熟シ、彈丸兩飛ノ裡、從容トシテ、死ニ就クノ概アリシニ反シ、敵ハ、弧城落日、士氣益々沈衰シツアル狀況ナレハ、今回ノ攻撃ハ、必ス成効スベキヲ確信シ、士氣大ニ振興セリ、又我連隊ハ、彈藥日々減少シ、今ヤ僅ニ一門六十四発ニスギザリシモ、八月以來、数万発ヲ射撃シテ、射撃諸元精確ナリシカハ、彈藥ノ欠乏ハ、射撃指揮ノ巧妙ヲ以テ、能ク其不利ヲ補ヒ得ルヲ信シタリ、

十二月十七日ハ、平素ノ如ク、一部ヲ以テ、H砲台ヨリ東鷄冠山砲台間ノ敵ニ対シ、時々制圧射撃ヲ加ヘ、翌十八日ハ、北砲台爆発ノ当日ナリシヲ以テ、朝來戦闘準備ヲ完了シ、午前十一時十分、先ツH砲台ノ敵砲兵ヲ制圧シ、次テ爆

発ノ時機熟スルヲ待テリ、

午後二時十五分、火藥庫爆発ノ如キ猛威ヲ以テ、東鷄冠山北砲台ノ胸墻爆発セラルヽヤ、一面白煙々タル積雪ノ裡、明ニ破壊ノ景況ヲ認識シ得タルヲ以テ、各大隊ハ、直ニ予定ノ目標ニ向ヒ、榴彈、榴霰彈ノ混合射撃ヲ開始セリ、之ト同時ニ、我重砲兵モ亦、各一齊ニ射撃ヲ開始シタルヲ以テ、其ノ爆煙ハ、北砲台及Q砲台ノ附近ヲ掩ヒ、壯觀云フベカラス、須臾ニシテ我突撃部隊ハ、相踵テ胸墻上ニ攀登シ、猛烈ナル爆撃ヲ初ム、此ノ時ニ於ケル我重砲及野戦砲ノ効果ハ、偉大ニシテ、敵ノ諸砲兵ハ、殆ト沈黙シ、殊ニH砲台及Q砲台内ノ敵砲ハ、全ク破壊セラレタリ、而モ勇敢ナル敵ハ、爆煙ノ沈下スルヲ待テ、直ニ胸墻上ニ躍出シ、爆藥ト銃劍トヲ以テ、我突撃隊ヲ撃退セントセリ、又我歩兵隊約四十名ハ、爆破ノ威力強盛ナリシタメ、積土下ニ埋填セラレ、無慘ノ圧死ヲ遂ケタリ、

午後三時五分、連隊段列ヲシテ、榴彈、榴霰彈各二十八発宛ヲ、一戸堡壘上ニアリシ石垣小隊ニ補充セラレタリ、

午後三時二十分、望台東南側ヨリ、敵ノ増援兵約百名、北砲台方向ニ急進中ナル旨、展望哨ヨリ報告ニ接ス、依テ直ニ野砲大隊ニ射撃ヲ命ジ、之ヲ潰乱セシメタリ、

午後三時五十分、望台上ニアリシ敵ノ輕砲ハ、頻ニ北砲台胸墻上ニアル我歩兵ニ向ヒ射撃セシヲ以テ、野砲大隊及第二大隊ノ一部ヲ以テ、之ヲ制圧セシム、午後四時四十五分、師團長ハ、自ラ予備隊タル後備歩兵第三十八連隊第二大隊ヲ率ヒ、北砲台外壕内ニ侵入セリトノ通報ニ接シタルヲ以テ、連絡ノタメ岡崎少尉ヲ北砲台ニ派遣セリ、

午後八時、岡崎少尉歸還ス、其ノ報告ニ曰ク、我歩兵ハ、北砲台胸墻上ヲ確實ニ占領セリ、敵ノ集中火八大ナラズ、然レドモ、咽喉部附近ニアル敵ノ機關砲ノ為メ、爾後ノ突撃容易ナラス、依テ山砲ヲ胸墻上ニ備ヘ、其ノ効力ヲ持テ、再度ノ突撃ヲナサントスト、依テ向井中尉ノ指揮スル砲車ヲ派遣セントセシモ、全夜午後十一時五十分、確實ニ北砲台ヲ占領シタル通報ニ接シタルヲ以テ、遂ニ之ヲ実行スルニ至ラズシテ已ム、此ノ如クシテ、攻撃目標タル北砲台ハ、全

夜確實ニ之ヲ占領シ得タルモ必然、敵ノ逆襲アルベキヲ予想シ、終夜附近ノ諸砲台ヲ射撃シテ、支軍ノ動作ヲ援助セリ、

十二月十九日八、前任務ヲ継続シ、絶ヘズ緩除ナル射撃ヲ施行セシモ、午後二至リ、北砲台ノ占領確實ニシテ、逆襲ノ慮ナキヲ知シ、射撃ヲ中止シテ、戦闘前ノ姿勢ニ復シタリ、

先ニ北砲台派遣セシ向井中尉ノ指揮スル砲車八、岡崎少尉ノ指揮スル砲車ト交代セリ、

此戦闘ニ於テ露軍八、火砲七門、機関銃四挺、人員約四百ヲ失ヘリ、此ノ戦闘ニ関シ、左ノ感状ヲ授与セラル、

感状

野戦砲兵第十一連隊

明治三十七年十二月十八日、東鷄冠山北砲台ニ対スル敵ノ銃砲火ノ制圧及増加兵来援ノ妨害ニ任ジ、午後二時十五分ヨリ一時五十分ニ至ル久シキ、克ク機宜ニ適スル有効射撃ヲ続行シ、重砲ノ射撃ト相俟テ、偉大ナル火力ヲ発揚シ、以テ突撃隊ヲシテ、胸牆上ニ於テ、殆ド外部ヨリ射撃ヲ受クルコトナク、安全ノ立脚地ヲ領有シ、遂ニ目的ヲ達スルヲ得セシメタリ、其ノ功績偉大ナリトス、

明治三十七年十二月十九日

第三軍司令官陸軍大将正三位勲一等功三級男爵 乃木希典

十二月十九日、総司令官ヨリ電報ヲ以テ左ノ通り達セラル、

北砲台占領部隊(隊号八略ス)

右諸部隊八、第十一師団長鮫島中将ノ指揮ニ從ヒ、十二月十八日、東鷄冠山北砲台ノ胸牆ヲ爆破シ、同時ニ突撃ヲ以ヒ、奮戦格闘、最後ニ師団長ノ自ら率フル予備隊ノ突進ニ依リ、遂ニ頑強ノ適ヲ撃退シ、確實ニ同砲台ヲ占領シ得タルハ、勇敢ナル動作ニシテ、功著大ナリト認ム、依テ感状ヲ附与ス、

満州軍総司令官 元帥侯爵 大山巖

此ノ如クシテ、我師団八、漸ク北砲台ヲ占領セリ、攻撃開始以來、月ヲ重スルコト満四ヶ月、犠牲ヲ供センコト約五千、攻撃幾度力失敗シテ、漸ク其ノ目的ヲ達シタル、其喜ヒヤ如何、殊ニ他師団ニ先ンシテ、本防御線上ノ一堅塁ヲ占

領シ得タル四国男子ノ面目ハ、之ヲ後世ニ伝ヘテ、以テ四国ニ永遠ノ^(誇力)トナササルヘカラス、

第九章 十二月二十日ヨリ三十一日ニ至ル状況

十二月二十日、師団命令ニ基キ、砲台中尉安部部長一郎ヲ東鷄冠山北砲台ニ派遣シ、同砲台占領ノ際、鹵得セシ火砲及弾丸ノ種類、口径、員数等ヲ偵察セシメ、其結果ヲ報告セリ、

十二月二十三日、第七師団八、後揚樹溝東北高地ヲ攻撃シテ、之ヲ占領ス、同日、向井中尉ノ率フル第五砲車及第六中隊、石垣中尉ノ指揮スル小隊ニ対シ、師団長ヨリ賞詞ヲ賦与セラル、

十二月二十四日、師団命令ニ基キ、第一中隊景浦中尉ノ指揮スル一小隊ヲ、一戸堡壘ニ出シ、第六中隊ヨリ出セル石垣小隊ト交代セシメ、別ニ第四中隊岡崎少尉ノ指揮スル一小隊ヲ、東鷄冠山北砲台ニ派遣セリ、

当日、曹長喜多四郎、特務曹長二昇進ス、

十二月二十五日、師団命令ニ基キ、次ノ要旨ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 十二月二十五日午後十一時 於北部王家屯連隊本部

一、第九師団八、来ル二十八日午前十時、二龍山正面ノ胸牆爆破ト同時ニ、突撃ヲ実施シ、之ヲ占領シタル後、為シ得レハ其ノ後方重砲ノ線ヲ占領スル筈、

師団八、此ノ攻撃ヲ援助ス、

二、連隊八、現在地ニ在テ、此ノ攻撃ヲ援助セントス、依テ各大隊八、左記目標区分ニ依リ、二龍山胸牆爆破ト共ニ、射撃ヲ開始スヘシ、

第一大隊 望台附近及東鷄冠山砲台咽喉部附近ノ敵砲

第二大隊 M、^(左) Q 堡壘

野砲大隊八、此ノ攻撃ニ参与スルタメ、野戦砲兵第二旅団長ノ下ニ復帰スヘシ、

十二月二十六日、彈藥大隊長安楽城少佐八中佐二、第一大隊長森大尉八少佐二

昇進セリ、

十二月二十七日、左ノ通報ニ接ス、

陸軍大臣ヨリ軍司令官へ内旨ノ件

「戦死者ノ進級、叙功ノ事ニ就テハ、先ニ申達置候処、其ノ後、各地ノ戦闘ニ於ケル戦死者ノ進級、叙功ノ稟申數ハ、別紙ノ通ニ付、御参考ニ供スルト共ニ、本官ノ懐抱スル意見ヲ開陳セントス、要ハ、右ニ該当スルモノハ、撰択ヲ敵ニシ、其ノ特典ノ価値ヲ發揮スルコトヲ勉メラレタル、此ノ特典ヲ濫授センカ、進級、叙功ハ、戦死者ニ与フル普通ノ常規タル感ヲ起スニ至ラシム、云々、

月日不明 第三軍ノ戦死者三九三三対シ、進級一〇一、叙功三八九

同日、留守師団參謀長ヨリ、左ノ通牒アリ、

戦局ノ發展ニ伴ヒ、野戦師団ノ補充ハ、益々急ヲ告クルニ至ル、之方応急ノ手段ハ、他ノ留守諸隊ノ幹部、上下一致シ、熱心精勵、新募兵ノ教育ヲ神速ニシ、後送患者ヲシテ、急迅ニ治療、復隊セシムルニ在リ、今ヤ敵ノ「バルチック」艦隊ハ、漸次我東洋ニ接近スルノ時機ニ切迫シ来ル、今後或場合ニハ、教育不完全ナル兵ヲ戦地ニ派遣シ、彈丸飛雨ノ下ニ於テ、教育ノ不足ヲ補修スルト同時ニ、^(優秀)妻者ニアリテモ、兵役免除ノ資格ヲ有スルモノト雖モ、此ノ刻下、非常ノ状況ニ鑑ミ、困難ニ奮起セシメテ赴カシムルヲ勉ムヘシ、

十二月二十八日、村岡、岡島、平原、野中、松本ノ五中尉ハ、大尉ニ進級セリ、同日、第九師団ノ二龍山砲台攻撃ヲ援助スルタメ、牽制射撃ヲ実施ス、而テ此ノ攻撃ハ、午後八時、確實ニ成功セリ、

此ノ戦闘ニ於テ、露軍ノ火砲十三門ノ外、多数ノ兵器糧食及數多ノ兵員ヲ失ヘリ、

十二月二十九日午後九時頃、旅順旧市街ニ、火災ヲ起セシモノ、如ク、烟煙天ヲ焦シ、壯觀ヲ呈ス、

今ヤ旅順要塞ハ、頗ル寒心スヘキ苦難ノ状態ニアリ、即チ将卒ノ大部ハ、病ノ犯ス所トナリ、日本軍ノ砲撃ハ、市街ノ各所ニ爆烈ノ威ヲ逞フシ、守兵ノ志氣ハ、多数將校ノ喪失ト兵員ノ減少ニ依リ、一層其ノ度ヲ増加シタルヲ以テ、守將「ステツセル」ハ、開城ノ已ムヲ得サルヲ認め、二十九日夜、諸將ヲ會シ、

會議ヲ開ケリ、此ノ會議ニ於テ、開城尙早說ヲ主唱セシハ、関東軍砲兵部長「ニキチン」少將、旅順要塞砲兵部長「ペールイ」少將、東狙砲兵第四旅団長「イルカン」少將ニシテ、皆砲兵科將官ナリシハ、奇ト云フベシ、而テ此說、遂ニ優勝ヲ占メ、「ステツセル」將軍亦之ヲ承認セリ、

十二月三十日、左ノ師団命令ニ接シ、牽制射撃ヲナス、

第十一師団命令 十二月三十日午前八時三十分

於大孤山北麓司令部

一、第一師団ハ、明三十一日午前十時頃ヲ以テ、松樹山砲台正面ノ胸墻爆破ト共ニ、同砲台ニ向ヒ攻撃ヲ実施ス、

攻城砲兵ハ、砲兵旅団並ニ第九師団ト共ニ、各々該攻撃ヲ援助スル筈、

二、師団ハ、明三十一日午前十時頃、松樹山砲台胸墻爆破ト共ニ、砲火ヲ開始シ、敵ヲ制圧シ、以テ第一師団ノ攻撃ヲ援助セントス、

三、野戦砲兵隊及四十七密速射砲隊ハ、主トシテH高地並ニ望台南方高地ノ敵ニ向ヒ射撃スヘシ、

但シ、右両高地以外ノ敵砲ニシテ、発砲シ、若クハ好目標現出スル場合ニ在テハ、機ヲ失セス之ヲ射撃スベシ、

四、各地区隊ハ、午前九時三十分迄ニ、警急配備ヲ完了シアルヘシ、但シ、前田、山中及竹内地区隊ノ砲兵ハ、前項目標ニ準シ、射撃ヲセシムベシ、

五、予備隊ハ、午前九時三十分迄ニ、現在地ニ集合スベシ、

六、衛生隊及臨時衛生隊ハ、午前九時三十分迄ニ、各現在地ニアリテ、繃帶所開設ノ準備ヲナシアルヘシ、

七、予八、午前九時三十分、大孤山上ニアリ、

第十一師団長 鮫島重雄

午前五時三十八分、旅順旧市街ニ、火災起リシモノ、如ク、黒煙漲リ、異様ノ爆声ヲ聞ク、正ニ是レ要塞陥落前ノ慘憺タル光景ヲ表ハスモノニ非スヤ、十二月三十一日、松樹山ノ砲台攻撃ヲ援助スルタメ、牽制射撃ヲナス、同日午後二時、左ノ通報ニ接ス、

第一師団八、本日午前十一時、松樹山砲台ヲ確美ニ占領シ、目下三ヶ中隊ノ兵ヲ以テ、全砲台内ニ於テ、占領工事ヲ為シツヽアリ、

尚、後方補砲台ノ攻撃計画中、

敵八、退却ニ際シ、全砲台、兵舎ノ一部ヲ破壊セシタメ、砲台内ノ敵兵八、白旗ヲ掲ケテ降服セリ、

露軍八、百二十名戦死シ、百三十名降服ス、

第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル状況

十二月三十一日、左ノ師団命令ニ接ス、

第十一師団命令 十二月三十一日午後一時

於大孤山北麓司令部

一、第七師団八、明一日払暁ヨリ、重砲及野戦砲ノ射撃ヲ開始シ、其ノ成果ヲ待テ、後三半頭村南方高地及成シ得レハ前半頭村東南方高地ヲ併セ、占領スル筈、

二、師団八、明一日払暁ヨリ、放火ヲ開始シ、砲撃ニ抛テ、敵ヲ牽制セントス、

三、野戦砲兵隊八、Hヨリ東鷄冠山砲台ニ亘ル敵陣地ニ向ヒ、午前七時、放火ヲ開始スヘシ、

四、予八、現在地ニアリ、

第十一師団長 鮫島重雄

午前七時、連隊八、予定ノ目標ニ向ヒ、砲撃ヲ開始セリ、同七時三十五分、H砲台附近ニ於テ、盛ナル砲声ヲ聞ク、依テ射撃速度ヲ増加ス、

同七時四十分、第九師団ノ一部、H砲台及其ノ附近ヲ占領スルヤ、更ニ射撃速度ヲ増加シテ、其ノ占領工事ヲ容易ナラシメタリ、

午前九時、我師団ノ歩兵、陸統望台頂上ニ向ヒ攀登シ、盛ナル爆薬戦ヲ始ム、依テ第一大隊八、望台背後ノ敵ニ向ヒ、猛烈ナル射撃ヲ実施シ、遂ニ殆ト此ノ

敵ヲ殲滅セリ、其ノ時、敵ノ砲弾八、我連隊ノ陣地ニ落達スルコト最モ甚ク、殊ニ東鷄冠山砲台ノ東南圍郭上ノ軽砲ヨリ、我第二大隊陣地ニ向テスル射撃ハ、

猛烈ナリシヲ以テ、第一大隊ノ一部ヲシテ、之ニ向ヒ狙撃的砲火ヲ加ヘシム、

午前十時十五分、連隊長深堀中佐八、第四中隊陣地ノ左翼ニアリテ負傷セリ、依テ第二大隊長酒寄少佐、連隊ヲ指揮ス、

正午頃、望台ノ頂上ニ於ケル敵八、頗ル頑強ニ抵抗シ、極力友軍歩兵ノ攀登ヲ妨害ス、依テ第一大隊ヲシテ、望台頂上及其ノ背後ニ向ヒ、極力射撃ヲ実施セシム、

午後零時四十分、第二中隊長原田大尉、敵砲弾ノ為メ、頸部ヲ貫通セラレ、即死ヲ遂ク、依テ安部中尉、代テ中隊ヲ指揮ス、

午後三時、望台頂上ニ対スル我重砲射撃ノ成績ハ、最モ有効ニシテ、木材及人体ノ飛散スルヲ見ル、同三時二十分、前田地区隊八、遂ニ望台ニ突撃シ、接戦

ノ後、同三時四十五分、全ク之ヲ占領セリ、音二名高キ望台モ、遂ニ我軍ノ掌裡ニ帰シ、旅順要塞ノ運命、今ヤ旦夕ニ迫ルニ至レリ、

望台ニ於ケル敵ノ歩兵八、僅ニ六十七名ニシテ、最後ニ八五名ニ減シタリト云フ、

某中隊ノ戦史ニ、左ノ一旬アリ、能ク當時ノ実況ヲ穿ツヲ以テ、左ニ録ス、

我師団ノ本防御戦、攻圍着手以來、毎戦未ダ成功ヲ見ズ、土氣稍々揚ラサル憾ミアリシカ、去ル十二月十八日ノ成功以來、各方面ノ捷報切ニ至リ、一般ノ士氣大ニ振フ、

本日ノ攻撃タルヤ、曉星ヲ戴キテノ祝報俄ニ起ル、万歳ノ声、折シモ金烏曉霞ヲ破リ、H砲台ノ旭旗ト相映シ、恰モ我軍ノ進路ヲ照スモノノ如シ、數日来、

時々雪ヲ催シ、晴雨定マリナク、北風身ヲ切ル計リナリシ、天候ノ今日ニ限り、一天拭フカ如ク、時ノ移ルニ從テ、暖氣次第ニ加ハリ、正後頃ニ至リテハ、數

日来、零下數度ニ下降セシ寒暖計モ、正數ヲ以テ數フルニ至リ、各所ノ結氷ハ、融解シ始メ、天候温度突ニ内地ニ於ケルカ如シ、為ニ旅順ハ、滿州ニ非ス、日

本ナリ、本日ノ成功、期シテ待ツヘキナリトノ言ヲ発スルモノアルニ至ル、加之、攻撃ノ進捗、頗ル好望ニシテ、全軍ノ士氣、頗ル増加シ、毫モ數月攻圍ノ

勞苦ヲ知ラサルモノノ如ク、誠ニ天ノ時ヲ得タルモノト云フベキカ、土氣旺盛ナルコト、動員下令ノ當時ニ倍ス、

新年

年八、茲ニ新二開戦第二年ヲ迎フ、昨夜、元旦用トシテ加給サレシ清酒一合、生野菜、干物野菜若干ニ、臨時急造ノ臼ニテ搗キタル生餅ヲ、各人平等二分配シ、各個自炊ト定メラレケレハ、元旦ノ御祝儀、陥落ノ前祝兼テ、武運ノ強カラシコトヲ祈ランモノト、昨夜ノ程ヨリ暇アル毎ニ、準備オサケ、怠リナク待チ設ケタル、元旦早々打出ス祝砲ト共ニ、下リシ攻撃命令、天気晴朗、氣和力ニ、日頃ノ恨、今日コソ八年始ノ血祭ニト、奮進ノ効ハ忽チ二見ハレ、敵八耳目ト恃ミタル望台高地ヲ占領ナシケレハ、午後四時、陣地ヲ下リテ幕舎ニ入り、盃ヲ揚ケテ万歳ヲ歌フ、素ヨリ山海ノ珍味ハアラス、一点ノ弦對交フルニ由ナシト雖、折々響ク銃砲声ハ、弦對ノ如ク、珍ラシキ生肉、勝餅ノ供へ、加之、数月来ノ大成効、全軍ノ喜ヒ何ニ比スヘキモノモナシ云々、

午後七時、左ノ師団命令ニ接ス、
第十一師団命令 一月一日午後七時

於大孤山北麓司令部

- 一、当師団ノ前田地区隊及第九師団ノ左翼隊ノ一部ハ、本日未明ヨリ望台ニ向ヒ突撃ヲ実施シ、午後三時四十分、全ク之ヲ占領セリ、
- 第七師団ハ、予定ノ如ク、本日午後、三半頭村南方高地ヲ、又第九師団ハ、H高地ヲ占領セリ、
- 軍八、次テ松樹山補備砲台ヨリ 後軍副官北方高地ヲ経テ、東冠山北砲台ニ亘ル線ニ進出セントス、
- 二、師団ハ、逐次東南方ニ向ヒ、占領地区ヲ拡張シ、M、N、Q、R及東冠山砲台ヲ占領セントス、
- 三、前田地区隊ハ、占領セシ地区ヲ確實ニ保持シ、山中地区隊ハ、戦況ノ發展ニ伴ヒ、漸次東南方ニ占領地区ヲ拡張スヘシ、
- 四、山中地区隊ハ、成シ得ル限り迅速ニ、先ツQ砲台ヲ占領シ後、M、Nノ高地ニ對シ、攻撃ヲナスヘシ、
- 五、新山地区隊ハ、前田、山中両地区隊戦況ノ進捗ニ伴ヒ、東冠山北砲及R砲台占領ノ準備ヲナシアルベシ、

- 六、竹内地区隊ハ、警備ヲ敵ニシ、機ヲ見テ突撃スルノ準備ヲナシアルヘシ、
- 七、野戦砲兵隊及四十七密速射砲隊ハ、攻撃ノ進捗ニ伴ヒ、機ヲ失スルコトナク、逐次陣地ヲ前方ニ移シ、以テ攻撃ヲ援助スヘシ、
- 八、予備隊ハ、現在地ニ在テ、出発ノ準備ヲ為シアルヘシ、
- 九、衛生隊及臨時衛生隊ハ、開設ノ準備ヲナシアルヘシ、
- 十、歩兵彈藥一縱列ハ、大孤山北麓ニ位置シアルベシ、
- 十一、諸報告ハ、大孤山北麓司令部ニ於テ受領ス、

第十一師団長 鮫島 重雄

此ノ命令ニ基キ、連隊ハ、時々夜間射撃ヲ施行シツツ、祝フヘキ三十八年ノ元旦ヲ送レリ、

第十一章 旅順開城及其ノ後ノ状況

一月二日午前三時、左ノ師団命令ニ接ス、

第十一師団命令 一月二日午前三時

於大孤山北麓司令部

- 一、敵ハ、二日午前令時四十分頃、東冠山砲台附近ニテ、一大爆破ヲ行ヒ、全時ニ爆藥ヲ投シ、銃砲ヲ乱射シタル後、俄然靜肅ニ復歸セリ、
- 山中、新山地区隊ハ、敵ノ退引セル狀況ヲ偵知シ、此ノ機ニ乘シ、迅速ニ前進シ、殆ント抵抗ヲ受クルコトナク、午前二時、Q、Z、M、N及東冠山冠山ニ亘ル線ヲ占領シタリ、
- 二、軍八、今日二日、天明ト共ニ、攻撃ノ動作ヲ中止ス、
- 三、師団ハ、攻撃動作ヲ中止シ、占領セル各地区ヲ確實ニ保持セントス、
- 四、各地区隊ハ、天明後、攻撃動作ヲ中止スヘシ、
- 五、野戦砲兵隊、四十七密速射砲隊ハ、天明後、砲撃ヲ中止スヘシ、
- 六、敵兵防禦工事ヲ為シ、若クハ我陣地ニ向ヒ発射スル場合ニアリテハ、諸隊ハ、射撃ヲ以テ妨害シ、若クハ制圧スヘシ、
- 七、予備隊ハ、現在地ニ在リテ、平常ノ姿勢ニ復スベシ、
- 八、衛生隊及臨時衛生隊ハ、平常ノ姿勢ニ復スヘシ、

九、歩兵彈藥縦列八、宿营地二在テ、平常ノ姿勢ニ復スヘシ、
 十、予八、依然大孤山北麓ニ在リ、

第十一師団長 鮫島 重雄

昨夜々暗ヲ利用シ、一戸堡壘ニ前進シタル第一中隊長ノ指揮スル一小隊及第四歩兵、陣地ニ前進シタル第四中隊(一小隊欠)八、遂ニ戦闘ヲ交フルニ至ラズシテ休戦トナレリ、

午後五時十分、左ノ通報アリ、

一、彼我ノ軍使八、会見ヲ終リ、我条件ノ下ニ全部同意シ、午後四時三十五分

ヲ以テ、開城ノ調印ヲ終レリ、

二、戦闘行為ヲ停止シ、警戒ヲ嚴ニスヘシ、

午後十時二十分、更ニ左ノ通報ニ接ス、

一、開城規約ノ調印八、午後九時四十五分ヲ以テ終レリ、

二、満州軍總司令官ヨリ、第三軍司令部ニ左ノ電報アリタリ、熱誠ト歡喜トヲ

以テ、貴軍任務ノ達成ヲ祝シ、長時日間、貴軍將卒ノ勇敢不撓ノ戦闘動作ヲ感賞ス、

斯ノ如クシテ、難攻不落ノ鉄壁八、遂ニ陥落シ終リ、又実ニ我海軍力封鎖ヲ初メテヨリ約十ヶ月、第二軍力南山ノ前進陣地ヲ攻略シテヨリ約七ヶ月、我第三軍力本防禦線ノ攻撃ニ着手シテヨリ実ニ二百三十八日、其ノ間、我軍ノ損害及消費彈藥ヲ単ニ戦闘詳報記載ノ数字ニ依リ計算スルモ、左ノ大数ニ達ス、若シ夫レ日常ノ死傷者、病死者及消費彈藥ヲ計上スル時八、其ノ真数果シテ如何、然レドモ、是ニ依テ十年前以前遠慮ノ恥ヲ雪キ、而モ本戦役ノ運命ヲ決シタルニ想到スルトキハ、是等ノ損害モ、亦決シテ高価ナリト云フヲ得ザルナリ、

区分	戦死者	戦傷者	行衛不明	死傷馬匹	小銃弾	砲弾
前地戦闘	一、九一七	八、八〇五	一〇三	三〇五	三、八三三、四三三	七六、〇〇六
本防禦線攻撃	六、七三六	二、四七五	七、〇四四	一〇二	八、五二六、四三八	二、四二八
計	八、六五三	三三、五五八	七、一四七	四〇七	一二、三五八、八七二	三〇〇、二八九

備考 一、本表八、第三軍戦闘詳報及各師団戦闘詳報記載ノ数字ヲ累計シタルモノトス、從テ日々發生シタル死傷者及消費彈藥八、本表中ニ含

有セズ、

二、生死不明者ノ大部八戦死シ、一部八負傷後俘虜トナリ生存シタルコト、後日ニ至リ判明セリ、

三、負傷者中、重傷者八、死亡シタルモノ多シ、

一月二日、砲兵大尉平原長志、当連隊中隊長ヲ仰付ラル、依テ第二中隊長ニ命課ス、

一月三日、師団命令ニ基キ、左ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 一月三日午後四時

於連隊本部

一、軍八、目下旅順要塞受領中ナリ、

第一師団八、其ノ一部ヲ以テ、本日正午迄ニ開城ノ担保トシテ、椅子山、大小案山子山及其ノ東南一帯ノ高地ニアル諸堡壘砲台ヲ占領セシ等、

師団八、現在ノ姿勢ヲ維持シ、要塞受領ノ完結ヲ待タントス、

二、連隊八、依然現状ヲ維持セントス、

但シ、第一中隊ノ一小隊及第四中隊(一小隊欠)八、旧陣地ニ復帰スヘシ、

三、許可ナク単独者ヲシテ、要塞及市内ニ入ラシムルヲ嚴禁ス、

今日、初テ旅順攻圍中ノ経緯ヲ、公然内地ニ通信スルコトヲ許可セラル、

一月四日、調印セシ開城規約左ノ如シ、

旅順要塞開城條件

一、露国陸海軍並ニ旅順要塞内ニ於ケル志願兵及軍属八、俘虜タルヘシ、

二、總テノ堡壘、砲台、軍艦、汽船、武器、倉庫、馬匹、其ノ他ノ軍事材料並

ニ露国政府ニ属スル貨幣及物品八、現在ノ俣日本軍ニ交付スヘシ、

三、前掲ニ條項ノ確實ナル遂行ヲ証センカタメ、露国陸海軍八、椅子山、案

子山、大案子山及其ノ東南二当レル諸山嶺ニ於ケル總テノ堡壘ヨリ、守兵

ヲ撤去シ、千九百五年一月三日正午迄ニ、堡壘、砲台ノ全部ヲ、日本軍ニ

交付スヘシ、

四、若シ露国陸海軍ニシテ、第二項ニ示シタル財物及開城締約書ニ記名調印ノ際存在セシ物件ヲ破壊シ、或ハ其ノ現状ヲ変スル時八、日本軍八、談判ヲ

中止シ、自由行動ヲ取ルヘシ、

五、旅順ニ於ケル露国陸海軍当局者ハ、旅順要塞図、水雷、地雷ヲ敷設セシ場所及其ノ他ノ奇險地ヲ示セル地図、旅順ニ在リシ陸海軍編成表、陸海軍將校名簿、軍艦、汽船、帆船表、普通人民ノ数、国籍、職業等ヲ示セル簿冊ヲ蒐集シテ、日本軍ニ交付スヘシ、

六、總テ武器、戰鬥材料、軍需品、建築物、貨幣及露国政府ニ属スル諸財物、馬匹、軍艦、汽船、帆船並ニ此等ノ船具等ハ、其現在地ニ保存セラレサルヘカラス、其ノ交付ノ方法ハ、日露両国委員ニ之ヲ定ムヘシ、

七、旅順ノ勇敢ナル防禦ニ敬意ヲ表スタメ、露国陸海軍將校及軍属ニ剣ヲ保ヒ戰役ニ参加セス、又日本ノ利益ニ反スル行動ヲ行ハストノ誓文ニ記名調印スル將校ハ、從卒一名宛ヲ伴ヒ、解放サルヘシ、又從卒ハ、誓文調印後ニ解放スヘシ、

八、露国陸海軍ノ武装セル下士卒並ニ志願兵ハ、正式ノ軍服ヲ着シ、携帶天幕及必要ナル私有物ヲ携ヘ、其將校ノ指揮ヲ受ケ、日本軍ノ指示セシ集合地ニ赴クヘシ、其施行細則ハ、日本委員別ニ之ヲ定ムヘシ、

九、傷病者ノ看護及俘虜ノ用ヲ充タス為メ、露国陸海軍衛生隊員及給与係ハ、日本軍ノ必要ト認ムル間、残留シテ日本衛生隊及給与掛將校ノ指導ノ下ニ、其ノ職務ヲ尽サトルヘカラス、

十、普通住民ノ分置、行政事務及市ニ属スル財産並ニ之ニ關スル文書ノ交付、其ノ他開城遂行ニ關スル諸事務ハ、締約書補遺ニ指示スヘシ、

十一、本開城締約書ハ、両軍ノ全権委員記名調印シ、調印後直ニ有効タルヘシ、

一月四日、師団命令ニ基キ、左ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 一月四日午前七時

於連隊本部

軍八、続テ旅順要塞受領中ナリ、

テ黄金山ニ至ル線以東ノ諸堡壘、砲台及軍用諸建築物ノ守備ニ任シ、爾余ノ諸部隊ハ、給養ナスト同時ニ、可成速ニ北進ノ準備ヲナサントス、
本日正午、軍司令官ハ、水師營ニ於テ「ステツセル」將軍ト会見セラレ、本日、次ノ訓示ヲ傳達セラル、

訓示

当師団ハ、昨年五月塩大嶼ニ上陸以來、直ニ旅順要塞ノ攻撃ニ從事シ、多大ノ犠牲ヲ供シ、幾多ノ困難ト戦ヒ、遂ニ其目的ヲ達成スルコトヲ得タルハ、諸子ト共ニ、大ニ慶賀スル所ナリ、

然レドモ、補充ヲ重ネタル為メ、師団ハ、其ノ実力ニ於テ、出発當時ノモノニ比シ、大ニ劣リタルコト、諸君ノ親シク認知セラルト所ニシテ、將來ニ於ケル師団ノ新任務ヲ追想セム、軼々寒心ニ堪ヘサルモノアリ、然ニ野戦的行爲ハ、要塞戦ト異リ、独断専行ヲ要スル機會、夥多ナルノミナラス、共同動作ニ依テ成功スルコト、又一層緊要ナリトス、故ニ此ノ際、諸君ハ、各其ノ部下ヲ確實ニ手裏ニ掌握スルハ勿論、常ニ他隊トノ共同行為ニ注意シ、教育不完全ナル將校下士卒ノ為メ、野戦戰術ノ研究、野戦動作ノ練習ニ全力ヲ尽シ、以テ迅速ニ完全ナル素質トナスト共ニ、長時日ノ駐軍及戰捷余弊ノ結果、漸次弛緩セル軍紀、風紀ノ振興ニ注意シ、特ニ最モ周密ニシテ嚴正ナル手段ニヨリ、之ヲ矯正ヲ實施シ、諸君平素ノ敏腕ヲ振フニ際シ、手足タル其部下ノ動作ヲシテ、遺憾ナカラシム如ク養成セラレンコトヲ希望ス、殊ニ疾病ノタメ、戰鬥力ヲ滅殺セラレサルコトニ就テハ、万腔ノ注意ヲ払ハシテ切望シテ止マサルナリ、如上ノ希望ハ、教育機關ノ骨幹タル完全ナル將校、下級幹部、不足セル今日ニ於テ、寒威酷烈ノ際、之ヲ達成スルコト容易ノ業ニ非ルハ、諸君ト共ニ、頗ル痛心スル所ナリ、然レトモ、国家危急ノ際、万難ヲ排シ、共心一致ヲ以テ、目的ノ達成ヲ図ルハ、刻下ニ於ケル最大急務ニシテ、又吾人ノ責任ナルコトヲ信ス、諸君幸ニ努メヨ、

右訓示ス、

明治三十八年一月四日

第十一師団長 鮫島 重雄

旅順開城後、「ステツセル」大將ノ部下ニ与ヘラレタル訓示、左ノ如シ、

武勇ナル旅順ノ防禦者ヨ

回顧スレハ、去年二月八日、旅順ハ、初メテ敵ノ砲火ニ驚カサレタリ、其ノ水雷、駆逐艦ハ、外港ニ投錨セル我艦隊ヲ奇襲セリ、爾来、茲二十一ヶ月ヲ閲セリ、当初、我要塞ハ、唯々海方面ヨリ砲撃セラレシノミナリシカ、五月以來ハ、陸方面ヨリ亦砲撃セラレタリ、金州陣地ノ武勇ナル防禦ハ、既二十分ノ推量ヲ博シタリ、而テ我軍ガ、此ノ陣地ヲ撤退セシ後、前進陣地ニ於テ、名譽大ナル戦闘初マレリ、優勢ナル兵力(殊ニ砲兵ニ就キ)ヲ集結セル敵ノ、執拗ニシテ頑強ナルト、汝等ノ比類ナキ武勇及野戦砲兵ノ熟練トハ、何レモ真ニ驚クニ堪ヘタリ、双台溝、大嶺溝、大啞山、長山嶺子附近ノ陣地、百七十三、百六十三、八十六高地及大白山附近一帶ノ山脉ハ、常ニ総テノ参戦者及其ノ後昆ノ記憶ニ存スベシ、我等ガ如何ニ大啞山附近ノ戦闘ニ於イテ戦ヒ、且ツ死スルコトヲ解セシヤハ、何人モ驚ク所ナルヘシ、

五月半ハヨリ七月三十日迄、汝等ハ、遠ク敵ヲ要塞ノ前方ニ阻支セリ、之カタメ、敵力、要塞ヲ攻撃スルニ至リシハ、七月末ナリキ、二月八日ヨリ今日ニ至ル迄、守兵ガ為シタル総テノ武勳ヲ茲ニ列記スルハ、到底不可能ノコトナリトス、敵力、要塞及大孤山、小孤山附近並ニ大頂子山ノ我前進陣地、寺院堡壘及水道角面堡第一号及第二号角面堡ニ近キ時、汝等ハ久シク之ヲ抑止セリ、就中203高地ニ在テハ、如何ニ大ナル武勇ヲ示シタリシヨ、九月中、世界ハ、既ニ我等力外部ヨリ援助ナクシテ、斯モ久シク要塞ヲ支持シ得タルニ驚ケリ、實際ノ状況ヲ見ルニ、真ニ比類稀ナリキ、多大ノ死傷ハ、我軍隊ノ武勇頑強ニシテ、人間以上ノ大労苦ヲ示セルモノニシテ、此ノ労苦ヤ、実ニ皇帝ヲ頭上ニ戴ケル武勇ナル汝等ニ限り、能ク之ニ堪フルヲ得タルノミ、從來、未タ有ラサル戦闘材料タル十一吋砲弾ハ、驚クヘキ威力ヲ逞フセリ、現ニ二月十五日、此ノ砲弾ノ爆裂ノタメ、我勇將「コンドラテンコ」中将ハ、勇敢ナル八名ノ將校ト共ニ斃レタリ、十五乃至十八封度ノ重量ヲ有スル此ノ砲弾ニ対シテハ、如何ナル掩蓋ト雖、安全ナルヲ得ス、我総テノ病院ハ損壊セラレ、我軍艦モ亦高山ノ陥落後、三日乃至四日以内ニ射壊セラレ、我軍艦モ彈藥半ハ消費セラレ、半ハ滅尽セラレタリ、然ルニ、無慈悲ナル一勁敵ハ、更ニ我要塞ノ内部ニ侵入シ来レ

リ、是レ則チ壊血病ナリトス、此ノ如キ形成ニアルニ拘ラス、汝等ノ勇氣、冒險心及汝等ノ耐忍ハ、殆ント底止スル所ヲ知ラサリキ、然リト雖モ、総テノ物ト同シク、抵抗力ニモ亦限リアリ、敵ガ要塞ニ近クニ從ヒ、其砲兵モ亦益々接近セリ、遂ニ旅順ハ、一鉄鑕ヲ以テ繞ラサレ、而テ突撃ハ八月二初マリ、以テ現今ニ及ビタリ、此ノ突撃ハ、戦史上、未曾有ノモノニシテ、勇敢ナル敵ノ大軍ハ、汝等ノ胸ニ当テ碎ケタリ、敵ノ砲兵ハ、其ノ火力ヲ發揮シ、以テ我等ニ重大ナル損傷ヲ与ヘ、今ヤ二十七露里ニ互ル防禦線ヲ護ルニ、僅ニ九千名ヲ存スルニ過キス、而モ此ノ半数ハ、病者ナリ、

斯ル状況ニ於テ、殊ニ龍山堡壘、清国全圍廓、吉永堡壘ヨリ、老鉄山ニ至ル迄、東部及西部正面ノ陥落ニ至リ、尚ホ防禦ヲ継続セント欲セハ、日々我隊ヲ無益ニ死セシムルニ過キサリナリ、予ハ、悲哀ノ念ニ堪ヘサルモ、又既ニ神聖ナル我等ノ義務ヲ尽シタルコトヲ確信シツツ、茲ニ戦闘ヲ中止シ、為シ得ル限リ有利ノ條件ヲ得ンカタメ、要塞ヲ撤退スルコトニ決心セリ、我軍艦ノ既ニ沈没セル現時ニ在テハ、要塞ハ、既ニ其避難所タル備置^(備置)ヲ有セサルナリ、

敵ヲ本軍ヨリ牽制スヘキ重要ナル第二ノ任務モ、亦既ニ達成セラレタリ、十万以上ノ敵兵ハ、我胸ニ当テ破碎セラレタリ、予ハ、断腸ノ思ニ堪ヘサルモ、皇帝及祖国ノ為メ、我為スヘキコトヲナシタリトノ自覚ヲ以テ、要塞ノ撤退ニ決心セリ、嗚呼、名譽赫々タル勇士等ヨ、十一ヶ月ノ防禦後、要塞ヲ棄ツルハ、二忍ヒサル所ナリ、然レドモ、今後ノ防禦ハ、無益ノ血ヲ流スニ外ナラサルハ、予ノ確信スル所ニシテ、予ハ、要塞ノ撤退ニ決心セサルヲ得サリキ、我偉大ナル皇帝及信実ナル祖国ハ、決シテ我等罪セサルヘシ、我等ノ行為ハ、全世界ノ認ムル所ニシテ、何人モ皆之ニ対シテ讚歎スル所ナリ、皇帝陛下ノ侍從將官トシテ、皇帝ノ名ニ於テ、予ハ汝等ニ対シ、其ノ比類ナキ勇敢及攻圍ノ全期間ニ亘リ、非常ナル艱難ニ忍耐ヲ謝ス、

我等ハ又、皇帝及祖国ノ為メ、命ヲ戦場ニ損シタル名譽ノ將卒ヲ記憶セサルヲ得ス、親愛ナル汝等戦友ヨ、予ハ茲ニ満幅ノ謝意ヲ表ス、又汝等ノ勇敢ナル上官タル予ノ補佐官ニ謝スルハ、予ノ自ラ認テ義務トナス所ナリ、予ハ、軍医及赤十字並ニ看護婦ニ謝ス、又予ハ、防禦ニ際シ、諸種ノ役務ニ服セル者、自転

車手、運搬人等二謝ス、

予ハ、尚ホ生存セル汝等ノ上管^(官力)ニ謝意ヲ表スルト同時ニ、汝等ハ、常ニ名譽アル戦死者ヲ忘却スルコトナカルヘシ、神ヨ、願クハ彼等ニ平和ヲ与ヘ給ヘ、彼等ハ、謝意ノ念ヲ忘レサル、其ノ子孫ヲ回想シツ、必スヤ永久ニ活クヘシ、

開城ノ条件ハ、特ニ公示スヘシ、汝等力本國ニ帰ル迄ハ、軍人ノ態度ヲ辱シムルガ如キ事アルヘカラス、又我等ノ艱難ナリシ記念日ニハ、神ニ禱リテ捧ケ、決シテ卑劣ナル行為ニ依リ、汝等ノ名譽ヲ汚スコト勿レ、皇帝露國及世界ガ汝等ニ注目シツ、アルコトヲ忘ル、勿レ、汝等ハ、露國兵士力順逆ニ境ニ在テ、能ク其ノ操守ヲ変セサルコトヲ認ムヘシ、云々、

一月四日、満州軍總司令官ヨリ、当軍ニ左ノ感状ヲ附与セラル、

感状

第三軍

昨年六月下旬以来、旅順要塞ノ敵ニ対シ、長日月間、堅忍不拔、以テ堅ヲ破リ、強ヲ挫キ、遂ニ本年一月一日、敵ヲシテ力屈シ、開城ノ已ムヲ得サルニ至ラシメ、茲ニ旅順攻城ノ目的ヲ達シ、有終ノ光輝ヲ揚ク、依テ感状ヲ附与ス、

明治三十八年一月四日

満州軍總司令官侯爵 大山 巖

一月七日、陸軍砲兵中佐伊藤弦、当連隊長ヲ仰付ケラル

一月九日、總司令官ヨリ、勅語ヲ伝達セラル、

一月六日、左ノ勅語ヲ賜ハリ、謹テ伝達ス、

旅順ハ、極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ、第三軍及連合艦隊ハ、協同戮力久シク、寒暑ヲ冒シ、苦難ヲ凌キ、勇戦奮闘、克ク其ノ敵鉄壁ヲ奮取シ、堅艦ヲ殲滅シ、敵ヲシテ遂ニ城ヲ開ケ、降ヲ乞フニ至ラシム、朕深ク汝等將卒ノ克ク其重任ヲ全フシ、偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ニス、

奉答

旅順要塞ノ攻略ニ対シ、優渥ナル勅語ヲ賜フ、臣希典等感激ニ堪ヘス、謹テ奉答ス、

同日、皇后陛下ヨリ、左ノ令旨ヲ賜ハル、

我第三軍並ニ連合艦隊ハ、水陸協戮、旅順ヲ重圍スルコト数閱月、激戦幾百回、

堅ヲ破リ、鋭ヲ挫キ、辛酸壯烈、防備無ニノ天険ヲ冒シ、頑抗不屈ノ攻敵ヲ殲シ、遂ニ彼ヲシテ城ヲ開キ、降ヲ乞フニ至ラシメタル趣

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ、我將校下士卒ノ忠誠義勇、克ク偉大ノ功勳ヲ奏シタルヲ、深く御感賞アラセラル、

奉答

旅順要塞ノ攻略ニ対シ、優渥ナル令旨ヲ賜ハリ、希典等恐懼ノ至リニ堪ヘス、謹テ奉答ス、

又同日、山県參謀總長ヨリ、左ノ令旨ヲ伝達セラル、

一月七日、皇太子殿下ヨリ、左ノ令旨ヲ賜ハル、

勇敢無比、勇烈不撓ノ攻撃ニ因リテ、旅順要塞ノ鉄壁ヲ破リ、堅艦ヲ挫キ、遂ニ守將ヲシテ城ヲ開キ、降ヲ乞フニ至ラシメタル、第三軍ノ偉大ナル奏効ヲ嘆賞ス、

奉答

旅順要塞ノ攻陥ニ対シ、特ニ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ、臣希典等感激ニ堪ヘス、謹テ奉答ス、

旅順ノ陥落ニ関シ、一月十四日、露國皇帝ヨリ、陸海軍人ニ与ヘラレタル勅語

左ノ如シ、

旅順ハ、今ヤ敵手ニ落チタリ、

旅順口防禦ノ戦鬪ハ、十一ヶ月二亘リ、旅順口守備隊ハ、七ヶ月以上外地トノ交通ヲ遮断セラレタリ、此ノ間、我軍ハ、援軍ノ来ル望ナク、被攻圍ノ間、百般ノ損害ヲ忍ビ、敵軍ノ攻撃、其ノ歩ヲ進ムルニ從ヒ、備サニ惨苦ヲ嘗メ、生命ト鮮血ヲ惜マサリキ、

敵軍ノ激烈ナル攻撃ハ、實ニ我露國ノ自負心ヲ完フセシメタリ、此ノ防禦軍ノ功績ニ対シテハ、我露國ノ大ニ以テ誇トスル所ニシテ、全世界ハ、彼等ノ剛勇ナル動作ノ前ニ敬意ヲ表セリ、我軍ノ兵力ハ、日々減少スルニ反シ、敵ハ、堪ヘス新タナル兵力ヲ増加シ来リ、我ハ、之ニ対シテ、殆ンド戦鬪ノ手段絶ヘタルニ拘ラス、最後ニ至ルマテ、奮戦苦闘シ、以テ偉大ナル功績ヲ完成セリ、斯クノ如クシテ、遂ニ開城ノ已ムナキニ至ル、吾人又遺憾ナキナリ、

嗚呼、戦死セシ我同胞ノ靈魂ヨ、冀ク八地下ニ瞑セヨ、汝等ノ死ハ、永ク記念シテ忘レサルベシ、嗚呼、旅順防禦ノ為メニ斃レタル我露国ノ終世忘ルヘカラスル、同胞ヨ、汝等ハ、愛郷憂國ノ精神ヲ發揮シ、身八国難ニ殉シ、骨八遠ク天涯万里ノ野ニ横ハレリ、汝等ノ靈魂、冀ク八瞑セヨ、汝等ノ死ハ、吾人ノ心中ニ永ク記念シテ忘レサルヘシ、名譽アル生存者ヨ、神ハ、必ス諸子ノ創痍ト疾病トヲ医スルナルヘシ、而テ神ハ、必ス汝等ニ汝等力今後遭遇シ、経験スヘキ困難ニ対スル耐力ヲ与フナルヘシ、勇剛ナル我陸軍軍人ヨ、汝等力遭遇セル今回ノ惨苦ハ、汝等ノ精神ヲ攪乱スル能ハサルベシ、汝等ノ敵ハ、大胆ナリ、剛勇ナリ、汝等ハ、根拠地ト一万余里ヲ懸隔セル地ニ於テ戦鬪セシハ、汝等ノ為メニ無限ノ困難ナリシ、然レトモ、露国ハ、一大勢力タルコトヲ忘ルヘカラス、既往千年間ノ歴史中ニ於テ、今回ヨリ更ニ困難ナル経験、又更ニ恐ルヘキ危険ニ遭遇セリ、而モ此ノ困難ト危険トニ遭遇スル毎ニ、新シキ勢力ト、新シキ威力ヲ以テ、常ニ之ニ打勝テリ、

我国ハ、今回損害ヲ蒙リ、深ク精神ヲ痛メタリト雖、之力為メニ攪乱ニ失セサルナルヘシ、露国ノ勢力ハ、之カタメ一層ノ強度ヲ加フルニ至ラン、

朕ハ、神力我國ノ為メニ、新タニ勝利ヲ得ルノ時機ヲ授ケ給ヒ、朕力貴重ナル陸海軍ヲシテ、相協力シ、強敵ヲ撃破シ、以テ我国ノ名譽ヲ發揮セシメ賜フノ遠キニ在ラサルハ、朕ノ確信シテ疑ハザル所ナリ、

斯ノ如ク露帝ノ信任ヲ得、賞賛ヲ博シタル「ステツセル」大將モ、後ニ至リ、要塞司令官「スミノフ」中將ノ密奏ニ依リ、「フォーーク」中將ト共ニ、軍法会議

ニ附セラル、有罪ノ判決ヲ受ケテ、今ヤ詫シキ田舎生活ヲナシアリト云フ、

開城ノ條件ニ基キ、七日守兵ノ授受ヲ、十日諸物件、軍艦及備品ノ授受ヲ畢リ、翌十一日「ステツセル」八旅順ヲ去レリ、而テ開城ノ結果、日本軍ヘ交附セシ俘虜ノ数左ノ如シ、

將校 七百四十七名

下士卒 二万三千百三十一名

内東(留守)阻兵 一万二千三十五名

砲兵 四千二百十名

海軍兵 五千八百十八名

工兵 六百二十六名

騎兵 百七十二名

其ノ他 六十五名

開城当時、病院ニアリシ傷病者 八千三百三十六名

市外及部隊内ニアリシ傷病者 五千三百十三名

合計 三万七千五百二十七名

馬 二千五百頭

火砲 三百十二門

其ノ他諸建築物、糧秣、彈藥等ノ戦利品頗ル多シ、

壹月十三日、旅順新市街ニ於テ入城式アリ、当隊ハ、佐川大尉指揮下ノ下ニ混成一中隊ヲ編成シ、新市街ニ於テ乃木大將ノ閱兵ヲ受ケ、次テ解散シテ旅順ヲ見物ス、多日包圍ノ裏ニアリテ、彈痕慘憺タルモノアリシト八云ヘ、流石路人ノ経営セシ市府ノ事トテ、其ノ規模ノ雄大ニシテ莊嚴ナルト、無邪氣ナル彼我兵卒力互ニ相擁シ、嬉々談笑スルトハ、吾人ヲシテ身ノ戦場ニアルヲ疑ハシメ

タリ、

一月十四日、水師營ニ於テ、臨時招魂祭アリ、当隊ハ、野本大尉指揮下ノ下ニ徒歩セル混成一中隊ヲ編成シ参列ス、右終リテ第三軍將校ノ野宴アリ、天候稍々

寒カリシト雖モ、各人氣焰万丈、往々酩酊シテ、喜戯ヲ演スルモノアリシハ、

当時ノ状況、勢ヒ已ムヲ得サル所ナルヘシ、

斯クテ全軍北進ノ上途ヲ急キ、野砲兵二旅團ノ如キハ、既ニ出發シ、茲ニ再ヒ千古未曾有ノ奉天会戦ニ参加シテ、絶大ナル偉勲ヲ奏スルニ至リタル、我師團、殊ニ我連隊ノ行動ニ就テハ、更ニ次卷ニ於テ詳説スル所アラントス、

第四編 給養及衛生

給養及衛生ニ就テハ、前各章ニ於テ、略々当時ノ状態ヲ記述セリト雖、更ニ其全般ニ就キ、極メテ簡單ニ其ノ実況ヲ叙シ、以テ本書ノ終結ヲ告ケントス、

(次巻に目次より加筆)
第一章 給養

第一章 (前力) 上陸後ヨリ大攻山(孤力)攻略ニ至ル間ノ給養

塩大嶽上陸後、初回ノ守備線タル南沙(河力)河口ニ至ル連続数日ノ行軍間ハ、上陸地及途中ニ設置シアル兵站部ニ就キ、糧秣ノ補充ヲ受ケ、連夜窮屈ナル天幕露営ヲナセリ、而テ當時吾人力最モ渴望シテ、而テ得易ラサリシモノヲ生野菜トス、南沙河口到着後ハ、最近ノ倉庫ニ就キ、糧秣ノ補充ヲ受ケ、天幕露営ノ外、臨時兵力ヲ以テ急造シタル廠舎ニ起臥シ、一部ハ民家ヲ利用セリ、又副食物、燃料等ハ、其ノ一部ヲ各隊ニ於テ随意調辦スルコトトナリタルヲ以テ、大ニ便利ヲ感シタリ、殊ニ六月四日、大連ニ市場ヲ開設セラレシ以來、魚菜ノ供給稍々潤沢トナレリ、

六月十二日、左ノ訓示ヲ受領ス、

訓示

自今、師団需要ノ物資ハ、主トシテ当地方、就中「ダルト」ニ仰カサルヘカラス、之ガ為メ、曩キニ当該公署ノ周旋ト、師団ノ注意トニ由リ、漸ク開市茲ニ数聞日、然ルニ其購買方、甚タシク不当ニシテ、殆ンド強奪ニ近キ所為ニ出スルモノアルヤニ聞ク、夫レ如斯セハ、開市ノ永續ト物資ノ供給ハ、今後何レニ求メントスルカ、頗ル寒心ノ至リニ堪ヘス、抑モ地方人民ニ対シテハ、層一層我軍記ノ嚴肅ナル信徳無量ナルヲ知ラシメ、軍ノ利益ヲ圖ルノ主要ナルハ、復タ多言ヲ贅セス、是ヲ以テ、其ノ物資供給購買方ニ就テハ、已ニ屢々注意ヲ与ヘタルニモ関セズ、今ヤ忽チ非ナル至ル、之レ當ニ我師団ノ名譽ヲ損フノミナラズ、實ニ軍ノ消長ニ関ス、各官茲ニ留意シ、廠ニ部下ヲ戒飾シ、毫モ不法ノ購買ナカランコトヲ期スヘシ、

明治三十七年六月十二日

第十一師団長 土屋光春

六月十四日以来、時々馬匹ノ為メ、藁ヲ支給セラレタリ、

六月十七日、初メテ清酒若干ヲ給セラル、快味云フヘカラス、爾後、時々恤品トシテ、清酒、煙草、菓子、其ノ他ノ日用品ヲ加給セラル、又当時、危険ヲ冒シ、清酒ノ密輸入ヲナス商人アリテ、吾人ノ口腹ヲ充スニ便ナリキ、戦役間、連続支給サレシ圧搾秣ハ、其内容多クハ腐食シ、タメニ馬匹衛生上、有害ナル

結果ヲ来セシヲ以テ、乾草藁等ノ代用飼料トシテ、粟幹、黍幹等ノ調辨ヲ許可セラレタリ、其ノ他、吠ヲ細断シテ飼料ニ混シ、以テ食欲ノ増進ヲ計リ、且ツ青草ヲ与ヘテ、營養状態ノ維持改善ニ努力セリ、

六月十九日以後、炊爨用竈ヲ常時使用スル時ハ、破損速ナルヲ以テ、野竈ヲ構築シ、定式用竈ハ、行動間ニ限り、之ヲ使用スルコトニ規定セラル、又背囊ハ、行動間不便ナルヲ以テ、各隊ニ材料ヲ給シ、背負袋ヲ作ラシメタリ、其他、靴ノ保存ヲ顧慮シ、鞋ヲ穿用セシムルコトトセリ、

当日、五十人用天幕四組ヲ受領ス、

七月十五日以後、帽ニ垂布ヲ附シ、日射病ヲ予防セリ、

七月二十日ヨリ、大連小平島間ニ「ジャンク」ヲ以テ、糧秣輸送ヲ初ム、當時小平島ハ、給養ニ関シ、大連ノ前進根拠地タル觀ヲ呈セリ、

携帶口糧ニハ、糲ト重焼麵包ノ二種アリ、糲ハ、準備ニ時間ト勞力トヲ要スルヲ以テ、戦闘間ハ、主トシテ麵包ヲ賞用セリ、此ノ重焼麵包ハ、何時ニテモ喫食シ得ルノ便アリシヲ以テ、覺ヘス過食シテ、定量ニ不足ヲ告グルコト屢々アリキ、實ニ戦闘数日ニ亘リ、日夜心神ヲ勞スル時ハ、三回ノ定食ニテハ到底其ノ餓ヲ凌クニ足ラス、從テ機会アレハ、直チニ或ル物ヲ口ニセントスルハ、他ニ慾望ナキ戦場ニ於テハ、又已ムヲ得サル人情ノ弱点ナルヘシ、

八月初旬、脚氣病ノ流行ヲ来スヤ、命令ヲ以テ、麦飯ノ喫食ヲ励行セリ、

行軍及戦闘間、燃料乏シクシテ、炊爨ニ困難ヲ感シタルモ、諸種ノ手段ヲ尽シ、士民ノ反感ヲ顧ミルノ違ナク、其立樹ヲ切り、其ノ燃料ヲ徵發シ、以テ漸ク其ノ用ヲ辨シタリ、飲料水ハ、到ル所不良ニシテ、衛生上、有害ナルコト勿論ナリト雖モ、時正ニ夏期ニ属シタルヲ以テ、知ラス知ラス此生水ヲ飲用シ、為メニ脚氣病ノ続發ヲ来スニ至レリ、尚ホ戦闘ノ際ハ、士民ヲシテ生水ヲ陣地ニ運搬セシムルヲ例トセリ、

防蚊ノ手段トシテ、覆面蚊帳ナルモノヲ支給セラレ、漸ク頭部ヲ保護シ得タルモ、手足ハ、常ニ蚊軍ニ曝露スルノ状態ニアリキ、

七月中旬ニ至レハ、天幕ノ塗料既ニ剥脱シ、防雨ノ功ヲ呈セサルニ至リシヲ以テ、塗料ヲ受領シ、余暇ヲ見テ、交互ニ塗抹セシメタリ、飯盒炊爨ハ、兵卒ノ

最モ希望スル所ナリシモ、其ノ破損ヲ顧慮シ、之力使用ヲ嚴禁セラレタリ、

第二節 旅順要塞本防禦線攻囲間ノ給養

本防禦線ニ近迫後ハ、終始同一陣地ニ固着シテ、移動スルコトナカリシヲ以テ、給養ノ実施ハ頗ル簡便ナリ、当時、恰モ唐黍、大小豆等ノ成熟期ニ属シタルヲ以テ、頑是ナキ兵卒ハ、争フテ之ヲ裁取シ、一ヶ月ヲ出スシテ附近ノ畑地ヲ荒廢ニ帰セシメタリ、又多少ノ生野菜モ、附近ノ村落ニ於テ、徵発シ得ル狀況ナリシヲ以テ、飯盒ニ依リ、私ニ温汁ヲ調理セル兵卒アルヲ見受タリ、

炊爨ハ、段列ニ於テ実施シ、輪卒ヲシテ之ヲ陣地ニ運搬セシメタリ、当時、砲手ハ陣地ニ、馭者ハ段列ノ位置ニアリ、而テ其距離遠キハ二千米ニ達シタルヲ以テ、陣地ノ守兵ハ、温食ヲ採ルコト稀ニシテ、給養上、馭者ニ比シ、不利ノ状態ニアルヲ免レサリキ、

脚氣予防ノタメ、麦飯ヲ奨励セシコトハ既述ノ如シ、然リドモ、其ノ効果乏シカリシカ為メ、昼食ニ重焼麵包ヲ使用スルコトナレリ、

九月二十日、追送毛布ヲ受領シ、分配セリ、

幕営ノ方法ハ、陣地ト段列トノ間ニ多少其ノ趣キヲ異ニシタルモノアリ、即チ陣地ニ在リテハ、敵彈ニ対スル顧慮ヲ主トシ、且ツ警急集合ニ便ナル如ク、各其砲側ニ土窟ヲ掘解シ、段列ニ在リテハ、給養ノ便利ヲ主トシ、競フテ其ノ設備ヲ完全ナラシムルニ勉メタリ、故ニ段列附近ハ、純然タル穴居的小市街ノ觀ヲ呈シ、人馬ノ往来絡繹トシテ、雑踏ヲ極メタリ、

十月十三日、師団ニ縫靴工班各一班ヲ配属セラル、然レドモ、其ノ補修力ハ、到底師団下各隊ノ需要ニ応スルヲ得サリキ、

十月二十五日以来、黒色絨衣袴ハ、敵ノ目標トナリ易キヲ以テ、茶褐色夏衣ヲ各衣ノ上ニ襲着セシメタリ、各馬匹防寒ノタメ、馬糧袋ヲ以テ、毛伏ノ調製ヲ初メタリ、

十月二十六日以後、生豚、生牛ノ支給ヲ初メ、各部隊毎ニ、便宜屠殺スルコトナレリ、然レドモ、何故カ下士卒ノ大部ハ、豚肉ヲ喜バズ、為メニ給養上、非常ノ不便ヲ感シタリ、

十一月十日、防寒外套ノ着用ヲ許可セラレ、且ツ冬営ノ設備ニ着手スヘキ旨、伝達セラル、

十一月十三日、副食物ノ定量二分ノ一額ヲ、現地ニ於テ調辨スルコトニ定メラル、

十一月十五日、防寒被服全部ノ着装ヲ許可セラル、

当時、馭者ハ、^(戰力)比較的閑散ナリシヲ以テ、馬匹運動ヲ兼ネ、附近ノ原野ヲ涉獵シテ、枯草ヲ刈リ、以テ乾草ニ代用セリ、

十一月、採暖ノ為メ、第一線部隊ニ八木炭、第二線以後ニ八薪材ヲ増給セラル、十二月九日、防寒廠舎構築用トシテ、黍幹板、アンペラ、麻等ヲ支給セラル、

第二章 衛生

人馬衛生ノ状態ニ就テハ、前各章ニ於テ一、二其所見ヲ述べ、且ツ附表ニ依リ、数字ヲ以テ、其ノ概況ヲ表示スト雖モ、尚全般ニ付キ、其ノ状態ヲ揚ケ、以テ其実況ヲ窺知スルノ材料ニ供セントス、

第一節 人ノ衛生

動員間ハ勿論、待命間ニ於テモ、数次健康診断ヲ行ヒ、虚弱ナルモノハ、補充隊ノ要員ト其ノ都度交代セシメ、最モ健全ナル状態ヲ以テ、出征シタル力故ニ、渡滿ノ当初ニ於テハ、病兵殆ト皆無ナリシモ、六月初旬ニ至レハ、既ニ多少ノ患者^(患者)ヲ生シ、往々入院、治癒ヲ要スルモノアルニ至レリ、是レ一ニハ、氣候風土ノ相違、給養ノ欠乏、勞力ノ過大ナルニ原因スト雖モ、一ハ、戦時定員多大ニシテ、往々虚弱ナル兵員ヲ混シアルニ原因スルモノナリ、而テ諸種ノ原因中、最モ重大ナル影響ヲ及ボシタルハ、濕氣ヲ吸収シ易キ天幕、露営及ヒ給養ノ状態ニアリ、而モ是等原因ハ、戦時俄力ニ除去シ難キ軍陣營生上ノ弱点ナリトス、続テ七月中旬ニ至レハ、生水、殊ニ不良水ノ飲用、厭キ易キ缶詰類ノ食傷及濕氣ニ基キ、脚氣及下痢症ヲ併発シ、八月初旬ノ如キ、日々数十名ノ入院患者ヲ生スルノ苦境ニアリキ、即チ兵員ノ減耗ハ、戦闘ニ於ケルヨリモ、疾病ニ原因スルコト数倍ノ多キニ達セリ、サレバ屢々衛生講話ヲ行ヒ、清潔法ヲ励

行シ、衛生委員ヲ設ケテ、日夜健康状態ノ維持改善ニ努力セリト雖モ、今ヤ毫モ其効ナク、多クノ兵員ハ、顔色頓ニ憔悴シテ、意気揚ラサルニ至レリ、然レトモ、報国尽忠ノ精神ニ至リテハ、毫モ減退ノ趨勢ナク、寧コ受診、入院スルヲ恥テ、其ノ疾病ヲ隠蔽セント企図シタルモノ多カリキ、之力為メ、一旦入院スルヤ、未タ大連ニ後送セラレサルニ先キ、既ニ黄泉ニ旅シ、其然ラサルモノト雖モ、全治退院ニ多クノ時日ヲ要シタリ、旅順要塞本防禦線ノ攻撃ニ着手スルヤ、敵弾ニ対スル顧慮ト要塞戦闘ノ特質ニ因リ、運動ヲ要スルコト尠ナカリシヲ以テ、胃腸ノ疾病ニ罹ルモノ多ク、其然ラサルモノト雖モ、体力大ニ消耗セリ、依テ之力防遏手段トシテ、日々徒手、体操、土工作业、其ノ他労働ヲ強制シ、以テ其ノ健康状態ヲ回復スルニ努メタリ、又赤痢、室扶斯ノ如キ伝染性疾病ノ発生セザリシハ、實ニ幸福トセシ所ナリ、

現役兵ノ健康ハ、予備役兵ニ勝リ、予備役兵ノ健康ハ、短期教育ノ補充兵ニ優レリ、初回ニ出征セシ兵員ノ健康ハ、補充兵ニ勝リシコトハ、理論上正ニ然ルヘキ処ナルモ、事實ニ於テ、實ニ能ク這般ノ景向ヲ証明セリ、又兵卒ノ入院ノ比ハ、下土ヨリモ多ク、將校ノ病氣入院ハ、絶体皆無ナリシコトハ、名譽心及義務心ノ厚薄ニ起因スルモノト判断シテ可ナルベシ、

第二節 馬ノ衛生ニ就テ

在来ノ隊馬ハ、至テ健康ニシテ、其減耗率極メテ少ナカリシモ、徵発馬ハ、其ノ体質虚弱ニシテ、困苦欠乏ニ堪ヘス、行軍途中、或ハ斃死シ、或ハ廢役トナリ、且ツ飼料ノ変更ニ伴ヒ、廢馬ニ帰スルモノ尠少ニ非リキ、然レドモ、幸ニシテ、炭疽病ノ如キ伝染の疾病ニ罹ルモノナク、又保育ノ不備ニ起因シテ、廢斃トナリシ馬匹ノ尠カリシハ、軍馬補充ノ困難ナル帝國軍隊ニ在リテ、喜フヘキコトナリトス、平常吾人ノ装束スル愛馬の觀念力、戦時ニ至リ、特ニ注意ヲ促サスシテ周到ナルガ如キハ、素ヨリ当然ノコトナリト雖モ、又注意スヘキ一現象ナルベシ、

附録

第一 旅順戦闘歴

年号	明治三十七年	西曆千九百四年
二月八日	日本水雷艇、旅順口外ニ碇泊セシ露国艦隊ニ奇襲ヲ加フ、	
二月十二日	要塞司令官「ステツセル」中将、西比利亞第三軍団長トナル、	
二月廿四日	「スミルノフ」中将、要塞司令官トナル、	
三月八日	日本海軍、旅順港口ノ閉塞ヲ企ツ、	
三月十日	新 ^(本) 大平洋艦隊指令長官ニ任セラレタル「マカロフ」中将到着、	
三月十日	日本海軍、老鉄山ヲ隔テ、間接射撃ヲ行フ、	
三月廿六日	日本海軍、第二回ノ港口閉塞、	
三月廿九日	「ステツセル」中将、関東軍司令官ニ任セラル、	
四月十三日	「マカロフ」中将戦死、戦艦「ペトセバフロフスク」号沈没、	
四月十九日	第十一師団動員下令、	
五月二日	日本海軍、第三回ノ港口閉塞ヲ企ツ、	
五月六日	日本軍上陸、	
五月十五日	日本戦艦、初瀬、八島沈没、	
五月十七日	旅順要塞ト満州軍トノ連絡、全ク遮断セラル、	
五月廿一日	第十一師団、出征ノ途ニ就ク、	
五月廿五日	第十一師団、上陸開始、	
五月廿六日	金州南山ノ戦闘、	
五月三十日	第十一師団、第三師団ト守備ヲ交代シ、第一大隊第一線ニ就ク、	
六月十四日	第一大隊、初メテ敵ノ海軍砲火ヲ受ク、	
六月二十三日	旅順艦隊出撃シ、東郷艦隊ニ撃退セラル、	
六月廿六日	第十一師団、前進シテ剣山ヲ占領シ、第四中隊、初メテ砲火ヲ開ク、	
自七月三日	露軍、剣山ヲ回復セントシテ大挙襲来シ、日本軍、之ヲ撃退ス、	

至全六日
 自七月廿六日 大白山附近敵陣地ノ攻撃、
 至全廿八日
 七月三十日 蘇家、大領山、川柳ノ錦二前進、
 自八月七日 大小孤山ノ攻撃、
 至全九日
 八月十日 旅順艦隊ノ出撃、艦隊指令長官「ワイトゲフト」少將戦死、
 八月十六日 日本軍、勦降便ヲ送ル、
 自八月十九日 旅順要塞第一回総攻撃、
 至全廿四日
 八月廿二日 第一中隊長牧大尉戦死シ、第一大隊長森本少佐負傷ス、
 全日 第二中隊長桑田大尉、第十一師団參謀トシテ転出、
 九月六日 第一中隊長ノ後任トシテ栗並大尉到着、
 九月九日 連隊長足立愛蔵、第九師団參謀長トシテ転出、
 九月十一日 深堀中佐連隊長トシテ着任、
 九月十三日 第一大隊長ノ後任トシテ酒寄少佐到着、
 九月二十日 第一、第九師団方面ノ攻撃援助、
 九月廿五日 日本軍、二十八榴榴弾砲ノ射撃ヲ開始ス、
 十月廿二日 原田中尉、第二中隊長トシテ着任、
 自十月廿五日 旅順要塞第二回総攻撃、
 至十一月三日
 十月三十日 一戸堡壘占領、
 自十一月二十六日 旅順要塞第三回攻撃、師団長土屋中將負傷、
 至十二月六日
 十二月六日 二〇三高地ノ占領、
 自十二月五日 日本軍、港内ノ軍艦「ボルタワ」、「レドワイザン」、「ボベータ」、
 至全七日 「ペレスウエト」、「バヤン」、「パルラダ」、「ギリヤク」撃沈、
 十二月十四日 第二大隊長伊藤少佐転出、其ノ結果、酒寄少佐第二大隊長、森大

尉第一大隊長、

十二月十五日 「コンドラテンコ」中將戦死、
 十二月十八日 東鷄冠山北砲台ノ占領、松本中尉、第六中隊長トシテ着任、
 十二月廿八日 二竜山砲台ノ占領、
 十二月卅一日 松樹山砲台ノ占領、
 一月一日 望台ノ占領、第二中隊長原田大尉戦死、連隊長深堀中佐負傷、
 一月二日 旅順開城、
 一月三日 平原大尉、第二中隊長トシテ着任、
 一月五日 伊藤中佐、連隊長トシテ着任、
 一月十三日 日本軍、入城、
 一月十四日 第三軍臨時招魂祭ヲ水師營ニ於テ施行、
 第二 旅順戦闘ニ於ケル戦死將校略歴
 陸軍歩兵大尉牧信愛君ノ略歴
 君八、石州津和野藩ノ家老信成氏ノ長男ニシテ、其ノ先八遠ク宇多源氏佐々木源蔵氏ニ出テ、累代ノ祖先皆英名アリテ、事跡少ナカラズ、母「トミエ子」ト呼ビ、又名門ノ出ナリ、
 君八、明治八年ヲ以テ津和野ニ生レ、一姉三弟一妹アリ、幼ニシテ武事ヲ好ミ、長シテ秀才ノ聞ヘアリ、明治十四年四月、初メテ津和野小学校ニ学ヒ、同二十一年五月十五日、同校全科ヲ了ヘ、次テ同年九月、山口学校ニ入ル、
 明治二十五年五月、愈々志ヲ決シテ東京成城学校ニ転シ、爾来、鞠躬勉勵、常ニ同級ノ首席ヲ占メ、屢々賞典ヲ受ケ、令名頗ル高シ、
 明治二十七年、士官候補生ヲ命セラレ、同年十二月、野戦砲兵第一連隊ニ入隊ス、
 之ゾ君力軍籍ニ身ヲ投シタル初メニシテ、爾来、一年間、能ク隊務ニ勉勵シ、翌二十八年十二月、陸軍士官学校ニ入り、二十九年十二月、良好ノ成績ニテ同校ヲ了(越)ヘテ、三十年六月、少尉ニ任セララル、
 此年、我連隊ノ創設アリ、君、特ニ隊務ニ熱心ナル故ヲ以テ、撰ハレテ当隊ニ

転シ、軍務ニ執掌スルコト一年有半、隊務ノ成績群ヲ抜キテ可ナリ、

明治三十二年一月、陸軍砲工学校ニ入り、同年冬、同校卒業ス、其ノ成績頗ル好シ、

全年冬、砲兵中尉ニ任セララル、

其ノ後、第一中隊長代理ノ職ヲ奉シ、上下ニ対スル信用日々ニ加ハリ、中隊ノ成績、常ニ一歩ヲ擢デシモノ、皆之レ君ガ隊務ニ熱心ニシテ、統御其ノ宜シキヲ得タルニ用ラスンハアラス、

君ヤ資性温良、容姿端麗、最モ友情ニ富ミ、人ニ接スルヤ、温顔親切、部下ヲ遇スルヤ、恰モ敵父ノ愛児ニ対スルカ如シ、故ヲ以テ、部下皆心服シ、同僚又敬服ス、

明治三十五年十二月、砲兵大尉ニ進ミ、且ツ撰ハレテ騎兵実施学校ニ学ブ、故ニ馬術ノ造詣特ニ深シ、卒業数日前、偶々悲報アリ、両親、弟、妹共ニ時ヲ同シクシテ悪疫ノ冒ス所トナリ、病況日々ニ進ムト、嗚呼、君ヤ学業ニ將ニ成ラントシテ此ノ逆境ニ沈ム、誰カ一掬ノ涙ナカラン、而モ君ハ、尚ホ神冥ノ加護ヲ頼ミ、業ヲ了ヘテ帰ル、然ルニ時ナルカナ、命ナルカナ、天運今ハ拙フシテ、帰着ノ前夜、両親相踵テ斃レ、形骸徒ラニ冷フシテ、呼ドモ答ヘス、二弟、一妹、又頗ル重体ニシテ、藥石正ニ其ノ効ナカラントス、噫々、誰カ此ノ如キ逆境ニ沈ンテ、失心セサルモノゾ、然ルニ君ノ事理ニ明ナル、此ノ間ニ処シテ毫モ謬ラス、厚ク父母ノ靈ヲ弔ヒ、且ツ弟妹ヲ看護シテ、終ニ其ノ快復ヲ見ルニ至レリ、

某氏予ニ語ツテ曰ク、君ハ酒々落々ノ人ナリト雖モ、其ノ孝道ニ至リテハ、衆ノ企テ及ザサルモノアリ、何ヲ以テカ、然リ云フ、曰ク、君ハ、少尉任官ノ當時ヨリ、必ス若干金ヲ割テ父母ニ送り、以テ養老ノ資ニ供セリト、君力家、素ト貧ナルニ非ス、而モ尚此ノ心アリ、孝心深厚ナルモノニ非サレハ、何ゾ能ク斯ノ如クナルヲ得ンヤ、

明治三十七年四月、動員下令ノ報ニ接スルヤ、君、雀躍シテ喜ンテ曰ク、今ヤ吾人ノ身命ヲ堵スヘキ秋ハ来レリ、暴露彼レ何者ゾ、今日はヲ膺懲スルニ非レハ、邦家ノ前途眞ニ憂慮ニ堪ヘス、一身一家、何ゾ顧ミルニ足ランヤト、又以

テ君力當時ノ決心ヲ察スルニ足ルヘシ、カクテ五月下旬、日頃鍛錬シタル中隊ヲ提テ征途ニ上リ、旅順攻囲軍ニ属シテ、日夜軍務ニ尽瘁シ、七月三、四日、

敵力大挙シテ剣山ノ要害ヲ奪取セントスルヤ、君ハ、中央縦隊ニ属シ、猪圈子溝西南高地ニ陣地ヲ占メ、力戦数刻、終ニ敵ノ希圖ヲ挫折シテ、又来リ冒サ、

ルニ至ラシメタリ、爾来、將士益々奮勵シ、君力馬前ニ死ヲ希ハサルモノナシ、七月二十六日、戦機正ニ熟シ、我軍拳テ大白山附近ノ敵壘ヲ攻ム、当時君ハ、

泰然自若、克ク中隊ヲ指揮シ、陣地ノ占領、敵状ノ偵察、射撃ノ指揮、皆宜シキニ適ヒ、射撃ノ効力、着々トシテ現ハレ、時ニ第一中隊ノ陣地ハ前出シ、敵野砲ノ有効巨離ニアリタルヲ以テ、三面ヨリ敵砲兵ノ疾風射ヲ受ケ、損害頗ル

多ク、殊ニ一砲車ノ如キ砲手、全部負傷シテ、最モ困難ナル状態ヲ呈シタルニ係ハラス、君力断呼タル決心ト、泰然タル態度ニ依リ、能ク中隊ノ士氣ヲ奮起セシメ、遂ニ攻撃功ヲ奏シテ、大白山ノ堅壘ヲ奪取スルヲ得タリ、同夜、君ハ、

厚ク戦死セル士卒ノ靈ヲ弔ヒ、且ツ部下ニ告ケ曰ク、虎ハ死シテ革ヲ留メ、人ハ死シテ名ヲ残ス、況ンヤ軍人ハ社会ノ花ナリ、咲ク時ハ、恰モ爛熳タル桜花ノ如ク、散ル時ハ、潔ク飄緲タル落花ノ如クナルヘシ、人生誰力死ナカラン、死スヘキ時ニ死シテコソ、花モ実モアル武士タルニ通ント、又以テ當時ノ決心ヲ推知スルニ足ル、

八月初旬、大小孤山ノ攻撃ニ着手スルニ先チ、君不幸ニシテ重キ病ニ罹リ、容態頗ル悪シ、軍医為メニ静養ヲ勸ムルモ、君固ク辞シテ従ハス、病ヲ排シテ戦陣ニ立チ、能ク任務ヲ全フセリ、義務心深厚ナルニ非スンハ、孰ソ能ク斯ノ如クナルヲ得ン、

八月十九日、大孤山北麓ノ陣地ニ進ミ、徹夜工事ヲ督シテ天明ヲ待ツ、翌二十日、敵前二千米ノ近巨離ニ於テ、巨大ナル敵ノ要塞砲火ニ浴シツ、益々工事ノ施設ヲ加ヘ、翌二十一日払暁、射撃ヲ開始シテ、先ツ当面ノ東南砲台ト対戦ス、然ルニ敵ハ、恰モ砲身大ノ爆裂弾ヲ以テ、盛ニ陣地ノ付近ヲ猛射シタリケ

レバ、中隊ノ受ケシ損害モ亦渺カラザリキ、

当日午後三時、大隊長及曹長ト共ニ、第一、第二中隊陣地ノ中間ニ構築セシ觀測所ニ位置シ、將ニ発射ノ号令ヲ下サントシテ、中隊ニ面セントセシ一刹那、

海岸砲台タル老律嘴ノ砲台ヨリ発射セシ十二珊加農ノ一砲弾ハ、美事ニ其ノ掩体ニ命中シテ、之ヲ粉碎シ、君ノ頭蓋ヲ奪取シテ、又、影ヲ留メサルニ至ラシメ、尚大隊長及曹長ヲ地下埋没シテ、是ヲ窒息セシムルニ至レリ、

君ノ戦死スルヤ、官其ノ功ヲ賞シ、授クルニ功五級金鷄勳章ヲ以テシ、併セテ勲五等双光旭日章ヲ下賜セラル、又以テ名門ノ譽ヲ全フシタリト云フヘキナリ、

陸軍砲兵大尉林正富君ノ略伝

君ハ、元松山藩ノ士、原田政功君ノ第三子ナリ、母ヲ「フサ子」ト云ヒ、明治十一年、同市柳井町ニ生ル、天性伶俐、潤達ニシテ、神童ノ称アリ、十七年六月、愛媛県師範学校附属小学校ニ入り、二十一年九月、松山高等小学校ニ転シ、二十五年四月、同校ヲ了ヘタリ、次テ愛媛県立尋常中学校第二級ニ入学シ、同年九月、広島県立尋常中学ニ移ル、此ノ時ニ當リ、広島市在住ノ鳥取県土族陸軍歩兵大尉林久実氏ノ養嗣子トナリ、林姓ヲ昌ス、是レ実ニ君ガ軍人的教育ヲ受ルニ至リシ端緒ナリトス、

久実氏ハ、豪邁不撓ノ士ナリ、部下ヲ愛スルコト、恰モ慈父ノ子ニ対スルカ如シ、故ヲ以テ象心悦服シ、之力用ヲ為スヲ樂ム、而モ一度身ヲ戦陣ノ間ニ投スレハ、勇膽手ノ如ク、鬼神壯烈ニ泣クノ概アリ、恰モ西南ノ役起ルニ及ヒ、少尉トシテ肥日ノ間ニ戦シ、常ニ勁敵ニ當リテ、能ク其ノ英鋒ヲ挫キ、身ニ創痕ヲ蒙ルモ、敢テ意トセス、タメニ屢々奇功ヲ奏シテ、上下ノ畏敬スル所トナレリ、後大尉ニ歴進シ、歩兵第二十一連隊ノ中隊長タリ、二十七年、日清干戈ヲ交フルヤ、大島混成旅団ニ属シテ、牙山開城ノ戦ニ其ノ英名ヲ轟シ、次テ九月中旬、平壤ノ攻撃ニ當リ、旅団ノ先鋒トシテ、船橋里ノ壘ヲ攻ム時ニ、敵兵倍加シ、砲声雷ノ如ク、弾丸雨ノ如ク下リテ、我兵將ニ退カントス、君、陣頭ニ立チ、戦ヲ督ス、不幸ニシテ、敵弾集注シテ重傷ヲ受ク、乃チ携フル所ノ軍用地図ヲ取り、扯裂シテ死ス、蓋シ我方略ヲ敵ニ秘センカタメナリ、沈勇豪毅ノ士ニ非スンハ、死地ニ臨ンテ、烏ソ能ク此ノ如クナルヲ得ン、宜ナリ、世人拳テ其ノ豪勇ヲ称シ、其ノ沈勇ニ驚ケリ、故ヲ以テ、林大尉ノ名、一時海内ニ鳴ル、正富氏ハ、幼ニシテ此ノ久実氏ノ養嗣子トナリ、薰陶ヲ受クルコト

茲ニ数年、其ノ間、儼然タル古武士の軍人ノ家庭ニ生長シ、玲瓏タル氏ノ精神ヲシテ、益々其光輝ヲ加ヘシメタリ、明治二十八年、幼年学校ニ入り、二十一年五月、全校卒業、六月、士官候補生トシテ野戦砲兵第五連隊ニ入隊ス、是レ君ガ我兵科ニ一身ヲ投ジタル端緒ナリトス、

越テ三十一年十二月、陸軍士官学校ニ入り、翌三十二年十一月、同校卒業、原隊ニ復帰ノ上、見習士官ヲ命セラレ、三十三年六月、砲兵少尉ニ任シ、即日我連隊附ニ補セラレタリ、

三十四年一月、陸軍砲工学校ニ入り、三十五年十二月、優秀ノ成績ヲ以テ、同校普通科ノ課程ヲ了ヘ、更ニ同校高等科学生ヲ命セラル、此ノ年十一月、砲兵中尉ニ進ミ、三十六年十二月、全校ヲ卒業シ、更ニ野戦砲兵射撃学校ニ入ル、学フ事六旬ニシテ、頓ニ日露戦役ノ序幕トナリ、学校閉鎖セラレ、連隊ニ復帰シ、即日第二天隊副官ヲ命セラレ、同年五月、出征シテ旅順攻囲軍ニ加ハリ、六月二十六日、敵ノ抛テ以テ頼ミトセル剣山攻撃ニ参加シテ、殊功アリ、七月三日、四日、敵ノ猛烈ナル剣山回復攻撃ニ対シ、力戦シテ敵ヲ撃退ス、爾来、約二旬、深ク敵地ニ入りテ敵状ヲ搜探シ、徹夜工事ヲ督シテ勇氣益々賑ヒ、奮然トシテ戦機ノ熟スルヲ待ツ、

七月二十六日、戦機正ニ熟シ、我軍拳テ大白山附近ノ敵ヲ攻撃ス、君、勇奮、能ク大隊長ヲ補佐シテ、射撃ノ指導ニ遺憾ナカラシメタリ、其ノ日、連隊ノ放列陣地ハ、両方面ノ敵砲兵ニ夾撃セラレ、将校以下多数ノ死傷ヲ生ス、然レトモ、士氣益々旺盛ニシテ、着々攻撃ノ歩武ヲ進ム、翌二十七日、自ラ掩体ヲ放棄シテ、敵状ヲ偵察シ、射撃ノ観測ニ努力シ、タメニ砲撃ノ効果的歴史トシテ、眼中ニ映ス、君、頗ル得色アリ、依然此クノ如クシテ、敵ノ十字火ヲ受クルモ、神色自若、平然トシテ、眼中ノ敵ナキカ如シ、大隊長、其ノ危険ヲ慮リ、強テ掩体ノ庇護ヲ受ケシム、須臾ニシテ、敵ノ一榴弾、大隊本部ノ掩蓋前約十米ニ於テ爆裂シ、一弾銃ク君ガ眉間ヲ貫キ、一喊声ト共ニ、遂ニ二名譽ノ戦死ヲ遂ゲ、聞クモノ皆其ノ勇ヲ賞シ、其ノ死ヲ痛マサルモノナシ、即日砲兵大尉ニ任シ、勲六等單光旭日章ヲ授ケラレ、且ツ功五級金鷄勳章ヲ叙賜セララル、噫、君ノ父ハ、日清ノ戦役ニ於テ、平壤ニ斃レ、時ヲ経ルコト十年ニシテ、嗣

子正富氏、亦名譽ノ戦死ヲ遂ケ、世ニ忠勇義烈ノ士劣ラスト雖、父子共ニ戦場ノ露ト消工、其ノ死状相類スルニ至リテハ、誰力千萬無量ノ感慨ナキヲ得ンヤ、予、嘗テ振天府ヲ拜觀シ、父子共ニ国難ニ殉シタルニ勇士アルヲ聞キ、感慨極リテ、自ら其義烈ニ涙ヲ掩ヘリ、而テ今ヤ我等ノ知友ニ於テ、林氏父子ノ如キヲ見ル、真ニ我等ノ好模範ナラントセンヤ、

君ノ逝ケル、洵ニ惜ムヘシ、然レドモ、屍ヲ戦場ニ曝スハ、寧ク戦士ノ希望スル所、而モ名ヲ萬世ニ掲ケ、譽ヲ振天府ニ競フニ至リテハ、男子ノ本懐、何物カ是レニ如カン、

君ハ、養父力唯一ノ愛女タル萬寿子ト婚シテ、一男児ヲ拳ケ、秀雄ト云フ、慈愛殊ニ深シ、義母中野氏、夙ニ烈婦ヲ以テ称セラル、死報至ルヤ、其女ヲ戒テ曰ク、軍人ガ戦場ニ死スルハ、無上ノ名譽ニシテ、正富ハ、能ク故人ノ遺志ヲ継キタルモノ、父子共ニ同シク、滿韓ノ土トナリ、聊力以テ武人ノ職責ヲ尽スニ幾カラントス、我力家、今ヤ両夫ヲ失フト雖、幸ニ秀雄ノ在ル有リ、彼ノ生長ヲ期シテ、三度軍人ノ家庭ヲ作り、以テ父祖ノ遺業ヲ継カシメント、聞ク者、皆涙ヲ流シテ其貞烈ニ感シ、其志操ヲ頌セサルナシ、滿寿女、亦即日剃髮シテ、唯々児ノ成長ヲ娛ムノミ、

嗚呼、人生ハ、真ニ朝露ノ如シ、而末亡人カ唯一ノ慰安タル息子秀雄君、能父祖ニ似テ、伶俐敏捷、一家ノ愛ヲ鍾メテ生長、殊ニ速ナリシニ、惜ムヘシ、一朝脳病ノタメニ、果敢ナクモ京都医科大学ノ病室ニ死ス、一家ノ悲嘆察スルニ余リアリ、然ルニ、而末亡人相謀リ、死児ニ向テ告テ曰ク、児ヨ、父及祖父ハ、共ニ国難ニ殉シテ、死ヲ戦場ニ損テタルモノ、児幼ナリト雖モ、徒ラニ葬ランニハ、地下ニ於テ父祖ニ見フルノ辞ナカルヘシ、国ヲ利スルノ道ニ至リテハ、一ナリ如カス、児モ亦、其死体ヲ解剖ニ附シテ、斯道ノ研究ニ資セヨカシト、児、若シ靈アラハ、其ノ感果シテ、如何ソヤ、当時、京坂ノ新紙、此ノ美談ヲ掲ケテ、其ノ美德ヲ賞揚セシモノ、真ニ次アル哉、

抑モ君ハ、天稟ノ俊才ニ、加フルニ養父母ノ感化ヲ以テシ、尚亦節婦萬寿子ノ内助有テ、能ク古武士ノ性格ヲ完成シ、殊ニ臨ミ、潔ク軍人ノ本領ヲ發揮セシモノ、豈ニ大丈夫、平日ノ願ナラサランヤ、現時、帝国ノ土風、日月ニ類レ、

青年相率テ、懦弱ノ弊風ニ陥ラントスルニ当リ、士氣ヲ振氣シテ、邦国ノ元氣ヲ其ノ未タ罄キサルニ復セントスルハ、實ニ我等將校ノ重責ニシテ、林一家ノ如キハ、真ニ帝国軍人ノ話、模範ナリト云フヘシ、

陸軍砲兵大尉原田千丸君ノ略伝

故陸軍砲兵大尉原田千丸氏ハ、防州ノ藩士原田氏ノ嫡男タリ、明治八年十二月七日、山口県周防ノ国岩国町ニ生ル、幼ヨリ学ヲ好ミ、非凡ノ才アリ、同十三年二月、山口県岩国ノ錦見小学校ニ入り、二十年三月、中等科第二級ノ業ヲ終了シ、同年四月、更ニ同県私立岩国学校ヘ入学、同年九月、私立山口学校ヘ転入セリ、全二十四年七月、全校ノ業ヲ了ヘ、同年九月、又山口高等中学校ニ入ル、此ノ間、夙夜匪懈、孜々トシテ、曾テ怠ル事ナシ、故ヲ以テ、人皆褒賞シテ、大ニ其ノ将来ニ望ヲ嘱セリ、

二十七年、八年、日清戦争ノ起ルヤ、当時君ハ、猶明窓浄椀ノ下、修学ニ余念ナキ身ナリシモ、大ニ時事ニ感スル所アリ、飄然其ノ志ヲ変シ、明治二十九年十月、士官候補生トシテ、身ヲ軍籍ニ投スルコトヲナリヌ、爾來、野戦砲兵第五連隊ニ入り、三十年十二月、士官学校ニ入学ヲ命セラレ、三十一年十二月、首尾能ク全校ノ業ヲ了ヘ、帰隊後、見習士官ニ進ミ、更ニ三十二年六月、少尉ニ任セラレ、全時ニ野戦砲兵第十一連隊ニ転ス、其ノ後、三十三年十二月、陸軍砲工学校ニ入学、三十四年十二月、同校ヲ卒業シ、三十五年十一月、又野戦砲兵射撃学校ニ入学シ、同年四月、全校卒業、帰隊ノ上、第五中隊小隊長トシテ熱心、其ノ職務ニ勉勵シ、為メニ一般青年將校ノ模範タルノ自アリ、三十五年十一月、中尉ニ任セラレ、三十六年十二月、撰ハレテ師團副官ノ榮職ヲ奉スルニ至レリ、三十七年四月十九日、日露大戦ノ動員令下ルヤ、同職ヲ以テ、直ニ從軍スル事トナリ、全年五月二十一日、出征ノタメ、香川県三豊郡詫間湾出發、全二十五日、清国盛京省塩大澳ニ上陸セリ、全年六月二十六日ヨリ十月十一日ニ至ル間、劍山、大白山、大小孤山、旅順要塞、第一回ノ攻撃等ニ参与シ、偵察及伝令勤務ニ服シテ、偉勲ヲ奉シ、全年十月二十二日、当連隊第二中隊長ニ転シ、全月二十五日、砲兵大尉ニ任ス、爾後数次、反復ノ要塞攻撃ニ参与シ、

常二勇名ヲ轟カセシカ、三十八年一月一日、大孤山北麓ノ陣地ヨリ、旅順背面望台ニ対シ、大声ノ疾呼、大有効ナル射弾ヲ送りケル、折シモ、白銀山方向ヨリセル飛弾ハ、遂ニ大尉ノ頸部ニ貫通シ、大孤山下、悲風蕭條タル陣地ノ露ト消エシメタリ、享年漸ク三十才、全年全月、其ノ効績顯著ナルニ依リ、特ニ勲五等功五級ニ叙セラレタリ、

昔ハ、班超、時難ニ会シテ感激筆ヲ投シ、一劔託スル所、封候ノ印ヲ帯スルニ至ル功成リ、名遂ケニシ者ヲ懷ヘハ、又快心ノ蹟、渺シトセス、而モ學術技能漸ク茲ニ成リテ、年齒正ニ而立ノ境ニ臨ミ、平生ノ蘊蓄是セリ、大ニ施スヘキノ秋ニ当リ、忽チ原上ノ霜トナリシ故人ヲ思ヘハ、啞口ニ人ヲシテ同情ノ涙ヲ注カシメスンハ非ス、然レトモ、大尉ノ如キ王愾ノ志ヲ^(誓)シテ、竟ニ国難ニ殉スル者、氣節正ニ其全キヲ致シ、希望ノ一部、又既ニ報ハレタルヲ視ル、真ニ是レ生キテ護国ノ良士官タリ、死シテ百世ニ廟食セラルヘキ武將ナリト謂フヘシ、

陸軍砲兵中尉高石榮吉君ノ略伝

君ハ、愛媛県下宇摩郡ノ人ナリ、父ヲ梅吉、母ヲ「トヨ子」ト云フ、世々農業ヲ業トシテ、勤儉精勵、産業ニ尽瘁シ、近郷ノ長者トシテ、郷民ノ推服スル所タリ、氏ハ、即チ其ノ三男ニシテ、明治十年十月十三日ヲ以テ、津根村ニ生ル、幼ニシテ学ヲ好ミ、神童ノ称アリ、津根村尋常小学校ヲ了ヘ、二十二年四月、小富士高等小学校ニ入り、二十六年四月、全校ヲ卒業ス、後笈ヲ負フテ岡山ニ至リ、私塾ニ投シテ孜々勉勵ス、三十年三月、岡山関西中学第四年級ニ入り、三十一年十二月、全校卒業、三十二年十二月一日、士官候補生トシテ、野戦砲兵第十一連隊ニ入隊ス、是レ実ニ君力其ノ身ヲ軍籍ニ投セン初メナリトス、三十三年十二月、陸軍士官学校ニ入校シ、三十四年十二月、卒業、復隊ノ上、見習士官ニ進ミ、三十五年六月、砲兵少尉ニ任セララル、君力資性、温厚篤実ニシテ、衆ノ敬服スル所タリ、其ノ職ヲ尽スヤ熱心、其ノ人ニ対スルヤ叮嚀親切、事々物々其ノ肺腑ヨリ出テサルナシ、タメニ兵卒教育ノ成果良好ニシテ、恰モ一頭地ヲ抜キタル感アリ、而モ軍事ノ余暇、熱心哲理

ヲ研究シ、精神修養ニ努メタリ、又数学ト語学トハ、其ノ最モ親シム所ニシテ、将来ノ進歩、大ニ矚目スヘキモノアリキ、

此ノ如クシテ、連隊ニ服スルコト一年有半、其ノ徳益々高く、其ノ技愈々揚ル、三十六年十二月、陸軍砲工学校ニ入ルヤ、其ノ特意ノ才能以テ、孜々奮勵、將ニ大成ス所アラントス、偶々日露ノ鬭ヲ開カントスルヤ、人心興奮シテ鼎ノ沸クガ如ク、少壮ノ士官、皆滿州ノ風雲ヲ夢ミテ、学事ヲ放棄スルモノ多シ、此ノ時ニ当リ、君ハ、一人冷静沈着、益々學術ノ研究ニ余念ナカリシカ、一旦学校閉鎖ノ命ニ接スルヤ、奮然急行、帰隊セリ、以テ其ノ沈勇ノ人タルヲ知ルニ足ルヘシ、

三十七年四月十九日、動員下令ニ際シ、君ハ、第六中隊小隊長トシテ、五月廿二日、詫間灣ヲ出帆シ、全二十九日、清国盛京省塩大壩ニ上陸ス、爾來、旅順攻圍軍ニ加ハリ、六月二十六日、敵ノ依テ以テ旅順要塞ノ耳目トセル剣山ノ攻撃ニ参加シテ殊功アリ、次テ七月三日、四日ノ兩日ニ互リ、敵ノ大挙シテ剣山ヲ回復セントスルヤ、力戦シテ終ニ之ヲ擊退ス、爾來、三終日、乱泥橋東南高地ニアリテ敵ト相對シ、専ラ戦機ノ發展スルヲ待ツ、七月二十二日、攻撃準備ノ令下ルヤ、從來離レテ行動シアリシ第六中隊ハ、乱泥橋ノ陣地ヲ去リテ、猪圈子溝ニ轉進シ、初テ連隊ノ主力ニ合ス、超テ二十五日夜、暗ニ乘シテ大石洞溝東方ノ攻撃陣地ニ就キ、夜ノ明ケタルヲ待ツ、

當時、第六中隊ノ陣地ハ、連隊ノ最右翼ニ位置シ、君ハ、其ノ左小隊タリ、三十七年七月二十六日午前七時三十分、轟然タル我海軍砲ノ第一發ニ依リテ、攻撃開始ノ機會ニ達ス、暫時ニシテ我歩兵ハ、敵壘ニ肉迫シ、銃砲戦ノ状況、今ヤ酣トナル、當時、第六中隊ノ射撃ハ、敵ノ最モ苦痛トスル所ナリシカ故ニ、敵モ亦、全力ヲ以テ之ニ応戦セリ、為メニ忽チ敵ノ弾巢トナリ、人馬ノ死傷、材料ノ破損、続々トシテ頻出シ、其ノ状、悽慘ヲ極ム、君ハ、此ノ危険ナル間ニ、処シテ泰然自若、恰モ眼中ニ敵ナキカ如シ、為メニ号令皆機宜ニ適シ、砲火ノ効力、特ニ顯著ナルモノアリ、此ノ如クニシテ奮戦數刻、遂ニ其ノ音声ノ枯ルニ至ルヤ、旭日ノ章アル扇ヲ動かシテ、発射ノ記号トナシ、裕然トシテ射撃ノ指揮ヲナセリ、其ノ勇敢ニシテ無敵ナルノ状、恰モ古名將ノ儼ニ似タリ、忽チ

ニシテ敵野砲ノ全弾八、君ノ頭部ニ命中シ、其脳漿飛散シテ万事茲ニ休シ、大
 白山下ノ露ト消ヘ果テタリ、見ルモ其勇ヲ賞シ、其ノ死ヲ悼マサルナシ、
 享年僅ニ二十有八、功ニヨリ即日砲兵中尉ニ任セラレ、勲六等功五級ニ叙賜セ
 ラル、
 君八、平素酒ヲ嗜マス、而モ戦鬪ノ前日、融カス力如キ炎天ニ、猪圈子溝附近
 二清々タル少流河畔ニ、緑陰下杯ヲ拵ケテ、其ノ同僚ニ告ケテ曰ク、明日ノ戦
 鬪ハ、国軍消長ノ岐ルゝ所、真ニ吾人畢生ノ勇ヲ奮フヘキ時ナリ、相共ニ之ニ
 参加スルヲ得タルハ、実ニ今世ノ快事ナラスヤ、死生固ヨリ顧ミル所ニアラス、
 然レドモ、武士ハ、屍ノ上ノ名コソ惜ケレ、我若シ戦没セハ、屍体ノ処置、行
 李ノ始末等、皆兄等ニ任スト、快然袂別ノ盃ヲ交ハシテ別ル、又君ハ、常ニ
 詩ヲ賦シ、歌ヲ詠シ、以テ軍旅ノ無聊ヲ慰セリ、君ノ如キハ、真ニ風流ニシテ、
 而モ才幹アリ、文武兼備ノ高潔ノ士ト云フヘキナリ、

第三 旅順戦鬪ニ於テ戦死シタル下士兵卒連名簿

死亡月日	死亡場所	隊号	原籍	官等	氏名
七月一日	南沙河口	2	愛媛県温泉郡和氣村	一等卒	門間藤吉
七月四日	剣山	1	徳島県板野郡北島村	上等兵	坂東守一
七月廿六日	大石洞	3	全 川内村	軍曹	松浦柳蔵
全	全	6	愛媛県北宇和郡日振島村	伍長	久保里次郎
全	全	3	徳島県板野郡松茂村	全	富士忠平
全	全	6	愛媛県喜多郡平野村	全	清水主計
全	剣山	3	全 越智郡平野村	一等卒	渡辺浪三郎
七月廿八日	大白山	3	香川県仲多度郡善通寺町	全	稲田富三太
七月廿六日	大石洞	1	全 小豆郡豊島村	全	寺田松田郎
七月廿七日	全	6	愛媛県越智郡鴨部村	全	土屋革一
七月廿六日	大石洞	6	愛媛県西宇和郡神松名村	上等兵	浜井常一
七月廿六日	全	1	香川県大川郡引田村	一等卒	井上春蔵
全	全	6	愛媛県南宇和郡内海原村	一等卒	浜田菊太郎

計三十八名
 右ノ外、病死セシモノ七十名

七月廿七日	全	3	全 宇摩郡松柏村	上等兵	篠原磯吉
八月七日	全	4	全 北宇和郡愛治村	全	芝貞之丞
八月廿四日	旅順	6	香川県三豊郡桑山村	全	篠原菊太郎
七月廿七日	大石洞	3	徳島県三好郡三野村	全	田岡萬平
八月廿四日	旅順	3	愛媛県喜多郡奥南村	全	大野治平
全	全	5	全 東宇和郡狩江村	全	浜木福政
八月十日	全	6	全 宇摩郡川瀧村	一等卒	石川要三郎
九月八日	全	1	全 南宇和郡御庄村	伍長	尾倉高蔵
八月廿六日	全	4	全 温泉郡桑原村	一等卒	昭田幾馬
十一月三日	全	4	全 香川県綾歌郡法勤寺村	一等卒	西原東市
十一月廿七日	全	4	連隊段列 徳島県麻植郡川田村	上等兵	森田文助
十一月廿八日	旅順	6	愛媛県北宇和郡宇和島町	全	加納壽夫
十一月廿四日	全	6	香川県三豊郡観音寺村	一等卒	筒井清治
十一月廿八日	全	2	高知県香美郡夜須村	曹長	未久延秀
十二月五日	全	6	徳島県名西郡神領村	輪卒	後藤米蔵
十月三十日	全	1	全 三好郡井川村	伍長	井浦常吉
十一月十二日	全	6	愛媛県宇摩郡天満村	一等卒	富田徳丸
十一月九日	全	2	徳島県名西郡神領村	曹長	向井悦三郎
十月廿日	全	全	香川県丸亀市中府	馬丁	佐長崔雄
十一月九日	全	1	全 木田郡牟礼村	伍長	松本安蔵
九月廿一日	全	4	愛媛県喜多郡南久米村	二等卒	久保田幹衛
九月廿九日	旅順	1	愛媛県宇摩郡西海外村	上等兵	若松榮次
三十八年一月一日	全	1	全 伊予郡北山崎村	伍長	米並豊三郎
全	全	1	香川県綾歌郡飯野村	上等兵	藤田亀吉
一月一日	全	4	全 大川郡鴨部村	全	石原伊勢吉

附表第一 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、死傷者一覽

月日	戦死	戦傷	月日	戦死	戦傷	月日	戦死	戦傷
七月四日	—	—	九月六日	—	三	十一月七日	—	—
同 七日	—	—	同 七日	—	二	同 九日	—	—
同 廿三日	—	—	同 八日	—	—	同 十五日	—	—
同 廿六日	一〇	二三	九月十二日	—	—	同 廿四日	—	—
同 廿七日	五	二三	同 十九日	—	五	同 廿二日	—	—
同 廿八日	—	—	同 廿二日	—	—	同 廿七日	—	—
八月七日	—	—	同 廿五日	—	—	十二月十六日	—	—
同 八日	—	—	同 廿八日	—	—	十二月十七日	—	—
同 九日	—	—	十月五日	—	—	十八日	—	—
八月廿日	—	—	同 九日	—	—	廿四日	—	—
同 廿一日	—	—	同 十日	—	—	廿七日	—	—
同 二十二日	—	—	十月十九日	—	—	廿八日	—	—
同 廿三日	—	—	同 廿一日	—	—	計	二九	百五四
同 廿四日	—	—	同 廿三日	—	—	三十八年一月一日	三	—
同 廿五日	—	—	同 廿九日	—	—			
同 廿七日	—	—	同 卅日	—	—			

備考

- 一、本表八、連大、中隊ノ陣中日誌及其ノ隊ノ計歴ヲ涉獵、参照シテ、計上シタルモノトス、
- 二、戦傷中、死没セルモノアルモ、其詳細ヲ知ルニ由ナキヲ以テ、附録其ノ三ノ連名簿ト一致セザルヲ遺憾トス、
- 三、不慮、変死又ハ病死ニ係ルモノハ、本表ニ記入セズ、

附表第二 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、入(退)院患者一覽表

月旬	人員	月旬	人員	月旬	人員
六月 上旬	一二	九月 上旬	一〇(一二)	十一月 中旬	二〇
七月 上旬	七(一)	同 中旬	三三(七七)	同 下旬	二〇
全 中旬	一六(四)	十月 下旬	四五(七七)	十二月 上旬	一五
同 下旬	一七(二)	同 上旬	二八	同 中旬	一三(一一)
八月 上旬	七三(十二)	同 中旬	四八	同 下旬	一三(一一)
同 中旬	九〇(五)	十一月 上旬	八	同 上旬	一三
同 下旬	四二(五)	同 中旬	三〇(一一)	同 中旬	四七

計 入院 六百九十名 退院 四十九名

備考

- 一、本表八、連大、中隊ノ陣中日誌又ハ其歴史ヲ涉獵シ、計上シタルモノトス、
- 二、本表ノ人員中二八、戦傷者ヲ含マス、
- 三、本表人員中、本科將校二名モ入院患者ナカリシハ、注目スヘキ事ナリ、

附表第三 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル斃馬一覽表

月旬	斃馬	斃馬	入厩	退厩	月旬	斃馬	斃馬	入厩	退厩
六月 上旬	一八	三			十月 上旬	—	—	—	—
同 中旬	六四	—			同 中旬	—	—	—	—
同 下旬	六	—			同 下旬	—	—	—	—
七月 上旬	三	—			十一月 上旬	—	—	—	—
同 中旬	四	—			同 中旬	—	—	—	—
同 下旬	三	—			同 下旬	—	—	—	—
八月 上旬	三	—			十二月 上旬	—	—	—	—
同 中旬	二〇	—			同 中旬	—	—	—	—
同 下旬	三	—			同 下旬	—	—	—	—
九月 上旬	二	—			三十八年一月 上旬	—	—	—	—
同 中旬	七	—			同 中旬	—	—	—	—
同 下旬	二	—			同 下旬	—	—	—	—
計	一四六	七七	四五	三〇					

備考

- 一、本表八、連大、中隊ノ陣中日誌ヲ涉獵、計上シタルモノトス、
- 二、斃馬、入厩中、戦闘ニ起因スルモノヲ含ム、

附表第四 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル人馬補充一覽表

人		馬	
月日	補充人員	月日	補充馬
七月 十八日	一六 糧食縦列ヨリ	六月 廿三日	七五 糧食縦列ヨリ
二十三日	二八 補充隊ヨリ	七月 廿三日	六五 内地ヨリ
八月 十日	一七 全	八月 十一日	二三 全
十一日	一四 全	九月 二日	五六 全
九月 二日	七七 全	十月 十六日	四四 全
十七日	三二 全	十一月 廿三日	五 全
十月 十六日	一七八 全	一月 十八日	二三 鹵獲馬
十一月 廿七日	六〇 全	計	二九〇
十一月 廿一日	三〇 全		
十二月 廿三日	六九 全		
十二月 廿二日	九 全		
一月 十二日	一三八 全		
計	八七七		

備考

- 一、本表八、連大、中隊ノ陣中日誌ニヨリ、調製シタルモノナリ、
- 二、将校ノ転出ニヨル人馬ノ移動ハ、本表ニ掲ゲス、

附表第五 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間、彈薬消費一覽表

戦闘名又八月旬		消費		計	
榴弾	榴霰弾	銃榴弾	計	榴弾	計
六月廿六日 剣山攻撃	三四九	三四九	三四九	三四九	三四九

備考

- 七月三、四日ノ戦闘
- 大白山攻撃戦
- 七月廿日ノ戦闘
- 大小孤山ノ攻撃戦
- 第一回総攻撃
- 九月 中旬
- 十月 中旬
- 第二回総攻撃
- 十一月 中旬
- 十一月 下旬
- 第三回総攻撃
- 十二月 中旬
- 東鶏冠山北砲台攻撃
- 十二月 下旬
- 一月 下旬

一六八	一五六七	一七三五
一一〇〇	六三八〇	七五八〇
二二六	五六	五六
一四九〇	二二二二	二五三八
五	九六五九	一一四九
五二	二四	二四
三二	三四二	三九三
二二	二六八	二九〇
二二	四七一	四九三
一四	一五	二九
四一六	一六〇七	二〇二三
四六	七一	一一七
五一	三〇七	三七八
七四四	一五六〇	二四三三
三	二四	一二七
一	七三	七四
七一	四九九	七八五
六五	三二七	五八五
三三三	一五四	五四六
六八〇	一五二	二五〇四

備考

- 一、本表八、連大、中隊ノ陣中日誌及第三軍戦闘詳報ヲ参照シ調製シタルモノトス、然レドモ、其ノ記録ニ不備ノ点多キヲ以テ、確實ヲ保シ難シ、
- 二、彈薬中ノ鋼製ト銃製トノ区分ハ、明瞭ナラス、

本書八、大正五年、予力甲種学生トシテ、四街道射撃学校ニ在学中、妹縁ヲシテ筆者セシメシ者ニシテ、同人ノ拾数日ノ丹誠ニ依リ、完成セシ者也、

宇都宮敬行識

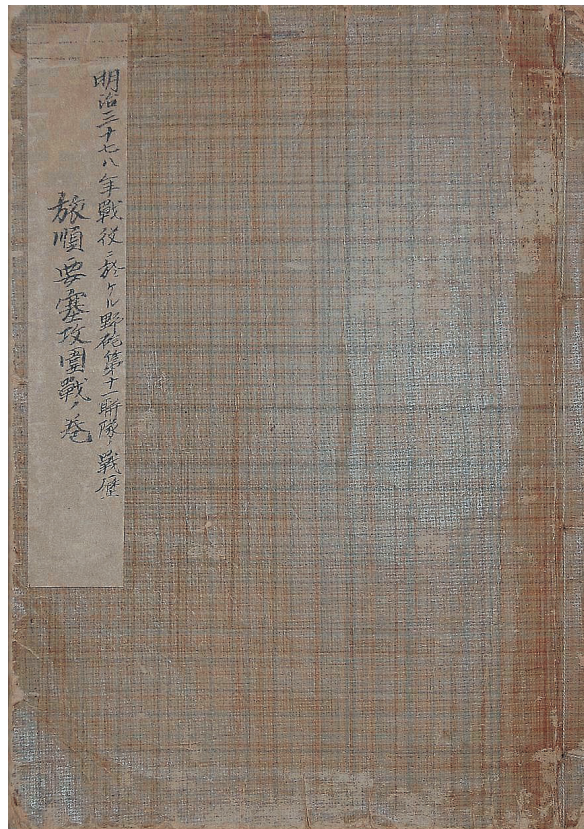


写真1 表紙

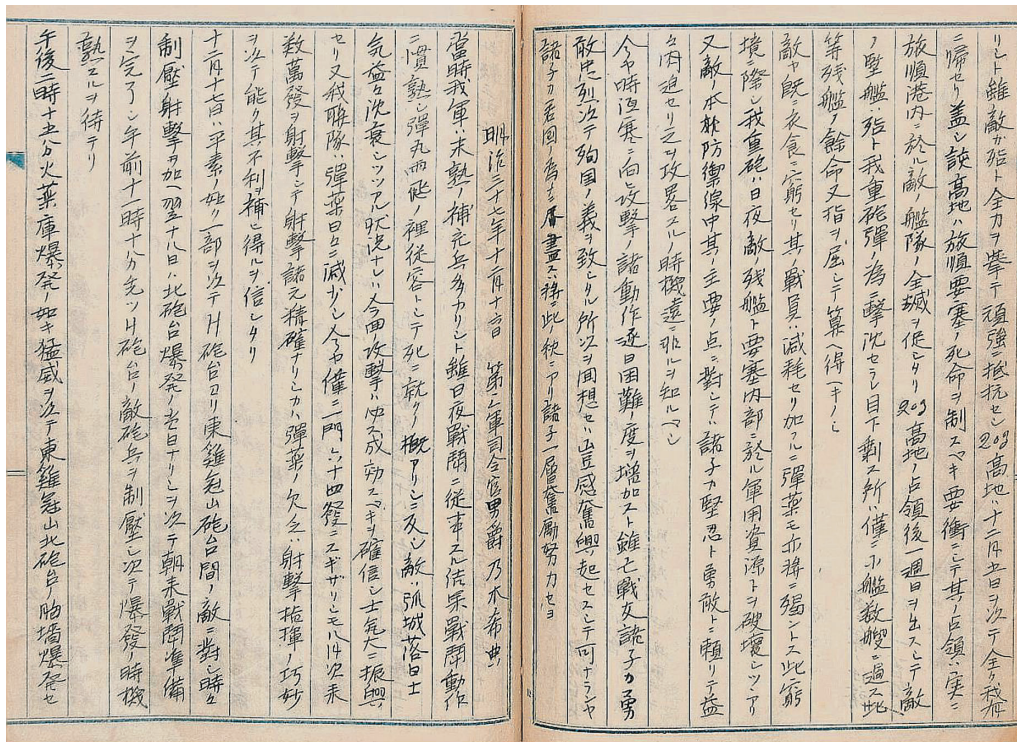


写真2 旅順戦の様子を詳細に記述した資料内容